清朝宮廷大戯『鼎峙春秋』について

――清朝宮廷における三國志劇――

小松　謙
京都府立大學

清朝の宮廷においては、「宮廷大戯」と總稱される演劇が上演されていた。規模は壯大だが內容空疎と考えられてきたこれらの演劇作品が、實は文學研究の上でも重要な價値を持つものであることは、別稿ですでに述べた通りである。① 宮廷大戯は壯大な規模を持つだけに、すべてが創作からなるものではなく、先行作品を多く利用することによって作られている。つまり、宮廷大戯はあるテーマに關するさまざまな演劇作品の集大成ともいうべき性格を持つのである。從って、宮廷大戯の內容を詳細に檢討することにより、その物語に關わるさまざまな演劇作品についてまとめて考察することができるばかりか、場合によっては、今では失われてしまった作品を部分的に再構成することも可能となる。また、『金瓶梅』を除く四大奇書の內容がすべて題材となっていることからも明らかなように、宮廷大戯は多くの場合先行する著名な小說と同じ內容を扱っており、しかも大規模なだけに、小說の內容の大部分が演劇化されていることが多い。從って、その內容を小說と比較することにより、同じ物語が演劇と小說ではどのような異なるかを明らかにすることができ、そこから小說の本文を見るだけでは氣づかないような問題點を浮かび上がらせることも可能になる。他方、清朝宮廷におけるさまざまな物語の受容のされ方を理解し、そこから清朝宮廷の性格について考える絲口ともなりうることはいうまでもない。

こうした研究を進める上では、本論でとりあげる『鼎峙春秋』は絕好の素材ということができよう。清朝宮廷における四大大戯の一つとして知られる本劇は、いうまでもなく宮廷大戯の中でも特に大きな規模を持つ作品であり、しかも取り上げられている素材は名高い三國志の物語である。この非常に人氣の高い物語が、『三國志演義』（以下『演

義』と略稱）にまとまるまでにさまざまな形で語り演じられ、小説の形を取った後もさまざまな變容を遂げたこと、あわせて演劇においても重要な題材となり、今日に至るまで演じられ、新たな作品を生み出し續けていることはいうまでもない。『鼎峙春秋』は、そうした三國志を題材とする作品群の中でも最大級の規模を持っており、特に演劇においては、このようにまとまった形で三國志の物語を舞臺に上せた例は他に存在しない。當然そこにはさまざまな演劇や小説の要素が混在している。これらを仔細に檢討することは、結果的に三國志を題材とするさまざまな作品を再檢討するきっかけとなりうるものであろう。

また、三國志はいうまでもなく王權に關わる物語である。清朝宮廷という王權そのものの中心ともいうべき場で、果たしてこの物語はどのような形で受容されていたのか。そのありようは、清朝における王權の意味についても一つの示唆を與えてくれるかもしれない。

本論においては、『鼎峙春秋』の內容を詳しく紹介・分析することにより、これらの問題について考えてみたい。②

一

『鼎峙春秋』は全二百三十九齣という巨大な規模を持つ。全體は十本に分けられており、第一本における關羽の華雄討ち取り、第三本における銅雀臺の宴、第五本における赤壁の戰い、第七本における曹操の卽位のように、末尾に華やかな場面が置かれている例が多いことから考えて、これは便宜的な區分ではなく、各本は一定の意味を持ったまとまりをなすものと思われる。つまり、『鼎峙春秋』は、二十四齣③からなる芝居を十本連ねて三國志物語を語るという壯大な意圖のもとに制作された演劇作品なのである。

ところが、これだけの規模を持ちながら、三國志物語がほぼ滿遍なく語られているというわけではない。そのことは、各本の內容を列擧するだけでもただちに明らかになる。各本の詳細な內容は、末尾にあげた附表の通りであるが、ここでは一つの目安として、各本の內容が『演義』毛宗崗本（以下「毛本」と略稱）の何回にあたるかをあげてみよう。

第一本　第一回～第五回前半
第二本　第五回後半～第二十回前半・第二十九回
第三本　第二十回後半～第二十五回・第五十六・五十八・五十九回
第四本　第二十六回～第三十八回・第二十三回
第五本　第三十九回～第四十九回
第六本　第五十回～第五十七回・第六十八回
第七本　第六十回～第六十六回（初めの部分）
第八本　第六十六回（續き）～第八十四回（前半）
第九本　第八十四回（後半）～第八十九回
第十本　第九十・九十一回

『演義』を基準にすれば、劇中で取り上げられている内容に著しい濃淡があることは明らかであろう。しかも、右にあげた『演義』の該當箇所の中にも、演じられない部分が多く存在するのである。各本の内容を更に具體的に確認してみよう。

第一本　プロローグ・劉關張の黄巾討伐・董卓の權力掌握・曹操らの擧兵
第二本　三戰呂布・連環計・蔡文姬・呂布滅亡・孫權立つ・許田の狩
第三本　劉備の脱出・董承らの曹操討伐失敗・關羽の投降
第四本　關羽顔良を斬る・千里獨行・古城會・劉備檀溪を跳ぶ・三顧草廬・禰衡曹操を罵る
第五本　博望燒屯・長坂坡・赤壁の戰い
第六本　華容道・劉備三郡を取る・劉備孫夫人を娶る・周瑜氣死・諸葛亮周瑜を弔う
第七本　劉備蜀を取る・趙雲幼主を救う・曹操魏王となる
第八本　關羽單刀會・劉備卽位・關羽魏と戰う・關羽の死・陸遜劉備を破る・劉備の死・曹操の死
第九本　八陣圖・劉禪卽位・孫夫人投身・曹操地獄を巡る・南蠻征討
第十本　南蠻征討・曹操ら地獄を巡って裁きを受ける・

エピローグ

一見して明らかな通り、全體に中心となっているのはあくまで劉備・關羽・張飛の三兄弟であり、その他の人物は彼らに關係する範圍で登場するのが基本である。實は、これはすでに『三國志平話』において認められた特徴であった。つまり、これは藝能の世界における三國志物語の基本的性格であったものと思われる。④ それゆえ、『演義』においてかなりの比重を持って語られる官渡の戰いなどの袁紹一統と曹操の戰いの物語は、關羽に關係する白馬の戰などを除けばほとんど無視されており、袁氏の滅亡自體全く演じられない。

同様に、三國の一つとして袁紹以上の重要性を持つはずの孫氏一族の物語も、三戰呂布・赤壁の戰い・孫夫人との結婚・夷陵の戰いという極めて直接的に劉備に關わる場面を除けばほとんど無視されているといってよい。第二本第二十三齣において、孫權が孫策の跡を繼ぐまでの經緯が非常に強引にまとめられていることは、吳の物語がこの劇においては全く副次的な意味しか持っていないことを示すものといえよう。

從って、劉備の死とともに物語は基本的に終わる。諸葛亮といえども副次的人物に過ぎない以上、五丈原の物語も演じられることはない。ところが、その一方で、例外的な部分が多數存在するのである。第二本における連環計は、三國志物語においては重要な要素であるが、劉備と直接的な關係はない。第三本における董承・吉平が曹操打倒に失敗する部分も、『演義』においては劉備が一味となっている點で無關係とはいえないように思われるが、『鼎峙春秋』では劉備は彼らのグループには參加していない。蔡文姫や禰衡の物語に至ってはなおさらである。また、第九・十本における南蠻征討の物語も、劉備死後の諸葛亮の物語自體が存在しない以上、なぜこのように詳しく演じられねばならないのか、そしてなぜ南蠻歸服をもって事實上この劇が終了するのかという疑問が生じる。

これらの問題について考えるためには、二つの視點が要求されよう。一つは『鼎峙春秋』はどのような方法で作ら

れたのかという視點、もう一つは『鼎峙春秋』は何のために作られたのかという視點である。

二

『鼎峙春秋』は、昭槤の『嘯亭續錄』卷一「大戲節戲」によれば、乾隆帝が莊恪親王允祿に命じて作らせたものだという。この記述が正しいとすれば、『鼎峙春秋』の成立年代は、莊恪親王が樂部を統括するようになった乾隆七年（一七四二）から沒する三十二年（一七六七）の間ということになるであろう。莊恪親王が音樂に通じていたことで知られる[5]點からすると、彼は單なる名目上の責任者ではなく、かなりの程度まで『鼎峙春秋』の制作そのものに關わった可能性が高いものと思われるが、しかし莊恪親王もゼロからこの長大な劇を創作したというわけではなかったことは明らかである。中國の演劇において先行作品を流用するのは決して珍しいことではなく、ましてやこのように多くの先行作品が存在する題材について空前の規模の演劇作品を作り上げようとするのであれば、それらを流用しないはずはない。事實、『鼎峙春秋』の中には、多くの先行作品の形跡を見出すことが可能である。そして、前節で述べた劉備と直接的な關係を持たない部分は、基本的にそれら先行作品をほとんどそのまま流用しているものと推定される部位なのである。

原據となった作品については、各齣ごとに附表に列擧してあるが、以下主なものを確認していこう。まず最も顯著に認められるのは、第一本第十一齣（以下この種の事例は「1－11」という形で表記）から2－8までの二十二齣のうち十五齣においてほとんどそのまま、一齣（2－2）においては全體の半分程度用いられている『連環記』である。明代中期の人王濟の手になるものとされるこの傳奇[6]は、今日もなお崑曲などでしばしば上演される人氣演目であるが、これらの諸齣の大部分において、曲辭のみならずセリフに至るまでほぼそのまま流用されている。なお、同劇には古い刊本は殘っておらず、數種の抄本を傳えるのみであるが、竹林本と通稱される中國國家圖書館藏本[7]及び『古本戲曲叢刊初集』所收の抄本と比較すると、基本的には竹林本に近

いものの、叢刊本に近い箇所もあり、いずれとも異なるテキストによっているように思われる。

第二にあげるべきは、3－16から4－14までの二十二齣のうち實に二十齣で利用されている『古城記』（作者不明）である。ただし、一致の度合いは『連環記』より格段に低く、一部が一致するのみである部分や、4－2・5・6のように明の周憲王朱有燉の雜劇「義勇辭金」と合致する部分と混ざり合っているケースも認められる。これらの部分にしばしば「滾白」という書きが見えることは、『古城記』が元來弋陽腔で演じられていた傳奇と思われることと符合しよう。ただし、滾調が置かれている部分は『古本戲曲叢刊初集』所收のテキストと合致せず、ここで利用されているのは別系統の『古城記』、もしくは『古城記』や「義勇辭金」を流用した他の作品であろうと思われる。

もう一つ、原據となっていることを確認しうるのは、4－21から6－12にかけて散發的に踏まえられている『草廬記』（作者不明）である。ただし、『草廬記』の利用の狀況は『連環記』『古城記』とは樣相を異にする。『連環記』『古城記』はかなり集中して使用され、特に前者はセリフに至るまでほとんどそのまま流用されている齣が大半を占めていた。つまり、該當箇所についていえば、『鼎峙春秋』は『連環記』をほとんどそのまま拜借しているといっても過言ではない。ところが、『草廬記』においては、本文がほとんど一致するのは5－17～20、つまり赤壁における借東風の前の部分と、6－12・16という劉備と孫夫人の結婚の一部分のみであって、その他は『草廬記』と演義や他の演劇作品（今は失われた『錦囊記』『赤壁記』『四郡記』などか）を組み合わせることによって作られている。無論、6－22が一部『草廬記』と一致する一方で、『綴白裘』所收の『西川圖』とはほぼ完全に一致することにはっきりと示されているように、『鼎峙春秋』が基づいているのは『草廬記』そのものではなく、『草廬記』を流用して作られた、もしくは逆に『草廬記』の原據となった他の演劇作品である可能性も十分にある。

以上の三つが、現在確認しうる『鼎峙春秋』が大規模に利用した演劇作品である。更に、より小規模な流用の事例

も複數確認することが可能である。

まず他作品をそのまま利用したことが明らかな事例を確認しておこう。一つは7－24・8－1における關漢卿の雜劇「關大王單刀會」第三・四折の流用である。ただし、同劇については元刊本とおそらく明の宮廷に關係するであろう趙琦美抄本しか殘っておらず、清代に完全な形のテキストが流布していたとは考えにくい。從って、『鼎峙春秋』が依據しているのがどのような「單刀會」のテキストであるかが當然問題になる。

附表に詳しく記したように、「單刀會」の曲辭を傳えるテキストは元刊本・趙琦美抄本以外にも多數存在するが、すでに土屋育子氏が論じておられるように、[8]それらはいずれも現存する元刊本そのものから出ている可能性が高く、また7－24に該當する第三折については、『大明天下春』等の弋陽腔系散齣集[9]が後半で曲の順序を入れ替えて大幅な變更を行っているのに對し、『綴白裘』等の崑山腔系テキストにおいては、その部分の曲自體が削除されている。[10]

7－24については、興味深いことに『鼎峙春秋』の本文はどの系統のテキストとも完全には一致せず、弋陽腔系テキストと一致する箇所もあれば、崑山腔系テキストにしかない語句も認められるという狀況であるが、全體的にいえば、最初のセリフをはじめとして、趙琦美抄本と合致する箇所が比較的多いように思われる。つまり、『鼎峙春秋』の本文は、當時出回っていた散齣集のどれとも一致せず、抄本のみを傳えるテキストと不完全ながら一致するということになる。一致の度合いが不完全であり、一部おそらく上演用テキストに依據する散齣集と一致するということは、おそらく上演の場で適宜改變されながら用いられていたテキストに基づいている可能性が高いであろう。そして、一番近い內容を持つ趙琦美抄本がおそらくはいわゆる于小穀本、つまり明の宮廷演劇に關わるものと思われるテキストであることから考えれば、[11]『鼎峙春秋』が依據したテキストは、明朝宮廷から清朝宮廷に受け繼がれたものだったかもしれない。

8－1については、崑山腔の上演用テキストに依據するといわれる『綴白裘』とセリフに至るまでほぼ一致する。

この齣を收録する『綴白裘』は乾隆年間の後半に刊行されており、先行する『綴白裘合選』には見えない⑫點からして、『鼎峙春秋』との間の先後關係は微妙なところであるが、完全に一致するわけではないこと、ほぼ同時期のものであること、7－24は『綴白裘』と必ずしも一致しないことから考えて、『綴白裘』そのものに依據するのではなく、兩者がほぼ同じテキストに基づいている可能性が高いであろう。つまり、『單刀會』と重なる部分は、おそらく明の宮廷經由で傳わった上演用臺本に依據している可能性が高いことになる。

もう一つ、明らかに他の作品を流用しているのが10－2・3である。『鼎峙春秋』においては、曹操は死後に十殿閻君のもとを順番に巡って罰を受けることになるが、その中ほど、五殿閻君のもとで、かつて迫害した禰衡が天宮の修文院舍人として赴任しようとしているところに出會い、判官の依頼により、かつて禰衡が太鼓を打ちながら曹操を面と向かって罵ったことを再演することになる。實はこのエピソード自體は4－24ですでに演じられており、後述するようにその部分は、本文が『三國志演義』の毛本に一致する點から考えて新たに創作された可能性が高いものと思われるのだが、ここでもう一度同じ場面が演じられるわけである。この部分の內容は、明の徐渭の有名な連作雜劇『四聲猿』の一篇「狂鼓史漁陽三弄」をほとんどそのまま使用している。このように同じ話を二度にわたって演じるのは、徐渭の雜劇の設定が、地獄の判官の前で死後の曹操たちに演じさせるというものであって、後述するように『鼎峙春秋』の重要な要素である曹操の地獄巡りとぴったり合致するからであろう。この部分は、セリフに至るまでほとんど『四聲猿』そのままといってよい。

以上が『鼎峙春秋』のうち、原據となった作品を現在確認しうる部分である。しかし、『鼎峙春秋』の構成要素となった先行作品はもとよりこれに限るものではなく、多くの今は失われた演劇作品が流用されているものと思われる。逆にいえば、『鼎峙春秋』の內容からそれら失われた作品の內容をある程度復元することが可能ということにもなる。次に、様々な手がかりから、それら現存しない先行作品と

關わる部分を割り出していきたい。

三

まず問題となるのは、1－4・7・8において、明の徐文昭編という『風月錦囊』の「精選續編賽全家錦三國志大全」[13]所收の曲と同じものが用いられていることであろう。これらは先行作品が現存する部分としてあげるべきであったと思われるかもしれないが、『風月錦囊』に見えるのは一部の曲辭だけであり、更に基づくところがあるものと想定されるのである。

『風月錦囊』は嘉靖三十二年（一五五三）、おそらくは建陽の書坊である詹氏進賢堂[14]により刊行された散齣集である。右にあげた部分には、この書に見える曲がそれぞれ一・四・三支用いられている。

「三國志大全」の性格については議論があるが、目錄には「三國志桃園記」と書かれていることが注意される。[15]「桃園記」とは、明末の祁彪佳の『遠山堂曲品』「具品」に、

三國傳中曲、首桃園、古城次之、草廬又次之、雖出自俗吻、猶能窺音律一二。

三國物語の曲としては、初めが『桃園』、次が『古城』、そのまた次が『草廬』となる。俗な曲辭ではあるが、音律の一、二はのぞき見ることができている。

と見える今では失われた傳奇である。祁彪佳の説明からすれば、『桃園記』は『古城記』『草廬記』と連續して三國志物語を演じていくかの如き內容を持っていたらしい（『草廬記』の項にも、『桃園記』と續いていて同一作者の手になるもののようだという記述が見える）。とすれば、他の二劇が大幅に流用されている以上、『桃園記』も『鼎峙春秋』制作にあたって利用された可能性が高かろう。このことと題目に「桃園記」とあることを考え合わせれば、『風月錦囊』と重複する部分は、實は『風月錦囊』のもとになった傳奇『桃園記』に基づくものと推定される。とすれば、『風月錦囊』に見えないものであっても、前後する部分は『桃園記』を流用している可能性が高いことになる。實際、この前後には『桃園記』に由來するのではないかとと思われる

場面が存在するのである。

1－3は事實上全篇の最初の場面であり、劉備が初めて登場するくだりであるが、いきなり劉備の二夫人が登場して、庭を散歩しつつ劉備とともに不遇を嘆くという、『演義』とはおよそかけ離れた内容を持つ。基本的に『演義』に忠實な内容を持つ『鼎峙春秋』において、なぜ最も重要な場面の一つである冒頭にこのような場面が置かれているのであろうか。これはおそらく、主人公とその妻（しばしば二人いる）が現れ、風光をめでつつ身の上を語るといういわば狀況設定の場面を冒頭に置くことが傳奇の一つの定式となっていることに由來しよう。つまり、1－3は何らかの傳奇の場面を流用している可能性が高いのであり、その原據である可能性が最も高いのは、『桃園記』ということになろう。

また、『風月錦囊』に依據していることが確認できる1－4と1－7にはさまれた1－5・6は、關羽が人助けのため熊虎を斬ることを演じる。これは、『演義』には全く見えず、明の内府本雜劇「桃園三結義」で演じられる關羽の出身傳とも内容を異にするが、實は、細部に異同はあるものの、京劇等で今日も演じられている物語なのである。つまり、演劇の世界では關羽の出身傳として熊虎を斬る物語が傳承され續けてきたのであり、その起源にはかなり廣く知られた演劇作品があったと見るべきであろう。それが『桃園記』である可能性はかなり高いものと思われる。この1－4・5は北曲の套數により構成されており、特に1－5は關羽の一人獨唱であることから考えて、何らかの雜劇に基づいている可能性も考えられる（ただし、『錄鬼簿』以下の雜劇題名目錄の中には、これに該當する雜劇名は見當たらない）が、假に他に原據があるとしても、『鼎峙春秋』はそれを取り込んだ『桃園記』に基づいている可能性が高いであろう。續く1－9・10・11・21も、『演義』とは直接の關係を見出しがたいこと、1－21の張飛が督郵を鞭打つ場面に、1－3同樣劉備と二夫人が春遊するという、物語の展開上全く不必要な場面があることから考えて、やはり『桃園記』に依據する可能性が高いものと思われる。

更にもう一つ、1－23の關羽が華雄を斬るくだりと、1

－24の三戰呂布のくだりは、劉關張を排斥しようとするのが『演義』の袁術ではなく孫堅であり、孫堅が華雄・呂布に破れて恥をかきながら責任轉嫁しようとするという道化的役割を擔うこと、張飛が單身呂布と戰う「單戰呂布」が存在することという『演義』には見られない特徴を持つ。そしてこれらは、『三國志平話』と明の內府本雜劇「三戰呂布」「單戰呂布」には共通して認められるのである。一方、呂布に關わる部分で多く流用されている『連環記』が、この部分については用いられていない。これらの事實から考えて、この部分は三國志物語のかなり古い要素を殘し、『連環記』より適切であると判斷される先行作品を流用しているものと思われる。『桃園記』がその作品である可能性は高いであろう。

次に注意されるのは、2－9・10・13・16・17及び6－13・14・18における蔡文姬の物語である。ここでは、蔡邕が董卓をかばって投獄されて死ぬこと、娘の蔡文姬が匈奴にさらわれて右賢王の妻になって二子をもうけた後、曹操の力で歸國し董祀と結婚することが演じられる。これはもとより三國志物語の本筋ではなく、『演義』でも詳細に述べられてはいない。しかも、2－13の文姬が匈奴にさらわれる場面では、文姬の小閒使である惜春が吳語のセリフをしゃべるが、これは『鼎峙春秋』においては他に『連環記』に基づく2－5に見えるのみであり、普通崑曲が南方で上演される際の慣例であることから考えても、『鼎峙春秋』の通常の體例には合わず、崑曲を流用した結果であるように思われる。しかも、同じ場面で文姬とはぐれた惜春は召使仲閒の李旺と夫婦になることになっているが、この明らかに伏線と思われる設定が後で生かされることはなく、二人は二度と登場しない。これは、他の演劇作品から一部分だけを抜き出して流用したことに由來する矛盾であろう。

また、2－16・17の蔡文姬が王昭君を弔うくだりは、明末淸初の劇作家尤侗の雜劇『弔琵琶』と內容が共通するが、曲辭は全く一致しない。尤侗が參考にした演劇作品がこの部分の原據と同一のものであるのかもしれない。

では、ここで用いられているものは何なのか。もとより確かなことはいえないが、存在したことを確認しうる蔡文

姫を題材とする傳奇としては、明代の劇作家黄粹吾（經歴不明）の『胡笳記』があげられる。

祁彪佳の『遠山堂曲品』「具品」では、『胡笳記』は、

此記以蔡琰結局、遂稱續琵琶記。白俱學究語、曲亦如食生物不化、是何等手筆、乃敢續琵琶記。

この劇は蔡琰で結んでいるので、『續琵琶記』と稱している。セリフは田舎教師の言葉ばかりで、曲も生ものを食べて消化不良に陥っているような代物、どれだけの筆力があるからとて、『琵琶記』の續篇だなどと大それたことがいえるのか。

と酷評されている。「學究語」とは、白話文學にありがちな底の浅いペダンティズムが認められることを指すものと思われるが、確かに6－14・18においては、詞牌を使用したセリフに始まり、焦尾琴について述べ、胡笳十八拍をうたうなど、そうした傾向がある程度認められるように思われる。

次に、3－4～11・15の董承・吉平らが曹操打倒を企んで失敗する部分も、青陽腔系統の劇種の特徴である滾白がしばしば認められること、董承を密告する召使の名前が『演義』の秦慶童ではなく苗澤となっていること、3－15において吉平の息子吉邈がただ一人脱出するという明らかに後の伏線となるものと思われる設定がありながら吉邈は二度と登場しないこと、『演義』ではずっと後で殺される馬騰が『鼎峙春秋』ではここで董承ともに自害するため、馬超による報復戰がすぐ續くことになって、後の展開との間に齟齬を來していることなどから考えて、やはり他の作品から一部を抜き出してきて插入した可能性が高いものと思われる。その點で興味深いのは、『演義』本文とこの部分の關係である。

後に詳しく述べるように、『鼎峙春秋』には『演義』の本文が多數流用されている。他の戯曲を流用した部分を除けば、その大半は中川諭氏の分類[16]に從えば二十四卷系諸本、つまり主に江南で刊行されたテキスト（本稿ではこの系統の代表として嘉靖本を使用した。附表ですべて嘉靖本？となっているのは、嘉靖本と合致するものの、この系統のどのテキストに依據するかは確定できないことを意味する）と合致し、毛宗崗本

（以下「毛本」と略稱）と一致する部分も多少存在するが、いわゆる二十卷繁本系、つまり建陽を中心として刊行されていた葉逢春本を初めとする諸本と合致する例はほとんど認められない。ところが、この董承らの物語を扱っている箇所については、嘉靖本や毛本より葉逢春本と合致する傾向が認められる。『草廬記』の本文が嘉靖本と葉逢春本の中間、ただしかなり葉逢春本寄りの内容を持ち、おそらく分化以前の原『演義』に近いものだったであろうという片倉健博氏の見解[17]に見られるように、實はこれは明代の傳奇において一般的に認められる狀況と一致するのである。嘉靖年間以前に成立した傳奇であれば、當然古い形態の『演義』しか參照できないはずであるから、もし葉逢春本などの建陽系の『演義』が古形により近いとすれば[18]、これは當然のことというべきであろう。とすれば、この部分の本文が葉逢春本と合致することは、早い時期に成立した傳奇に依據していることを示唆するものであることになる。

更に、登場人物のキャラクターにも注目すべきであろう。曹操配下の武將張遼は、一般的には思慮深い勇將として描かれ、關羽の友人であったためか、曹操の部下の中では好意的に扱われるのが普通である。ところが本劇においては、張遼は吉平が毒を盛ろうとしたことを見破る知惠者であり、吉平の一家を皆殺しにする暴虐の徒である。これは他の部分における張遼の描かれ方と矛盾しているようだが、實は「博望燒屯」（內府本）第二折・「黃鶴樓」（內府本）第二折といった雜劇においては、張遼は「百計張遼」と呼ばれる曹操の知惠袋と設定されており、この部分の張遼像は雜劇と合致するものなのである。こうした古い傳統が顏をのぞかせるのも、この部分がかなり早い時期に成立した先行作品の流用であることを示唆していよう。

では、ここで踏まえられている先行作品は何なのであろうか。董承の事件を主題とした現存する演劇作品としては、明の鄒玉卿の『青虹嘯』（『古本戲曲叢刊二集』所收）があるが、內容に一致する點は認められない。候補として考えられるのは、『遠山堂曲品』『曲海總目提要』に見える『射鹿記』であろう。兩書の記述からすると、許田の狩を題名とすることからわかるように、この傳奇の內容は『鼎峙春

秋』のこの部分とほぼ一致するものである。ただ、詳細が明らかではないため、確實なことはいえない。

更に、これは流用されていることが確實な事例として、6－2の『赤壁記』があげられる。關羽が華容道で曹操を見逃すこの場面と完全に一致はしないものの、セリフまでかなり近い内容のものが、青陽腔と崑山腔（前者が主體）のさまざまな一場面を集めた明の黄儒卿の選になる散齣集『時調青崑』卷二（四知館刊）に「華容釋操」として收められており、目錄ではこれは『赤壁記』の一齣とされているのである。

散齣集に記されているこうした劇名には怪しいものが多く、附表に見えるものだけでも『三國記』『五關記』『青梅記』といった他の文獻からは實在を確認できない劇名が見える。また8－1の單刀會の場面は、『怡春錦』卷七では實在が確認できる「四郡記」とされているのに對し、『玄雪譜』卷三では「三國記」となっている。これらの事實から考えて、散齣集に記された劇名は必ずしも正確なものではなく、通稱、もしくは適當につけられているだけである場合もあるものと思われる。しかし、『赤壁記』についていえば、『曲海總目提要』卷四十五に見えるところから考えて存在したことは確かであり、6－2は『赤壁記』の流用と見て間違いないであろう。

とすると、多く『草廬記』を流用しているこの前後で、『草廬記』とも『演義』とも完全には一致しない部分については、『赤壁記』の流用を想定すべきであろう。たとえば5－13のいわゆる「舌戰群儒」の場面は、『草廬記』の同じ場面と全く内容を異にしており、武將であるはずの呂蒙がなぜか文官として登場する。これはもしかすると『赤壁記』の設定に由來するものかもしれない。その他にも、諸葛亮が東風を呼ぶ場面など、『草廬記』とは異なり、『演義』とも必ずしも一致しない部分は多く、これらが『赤壁記』に由來する可能性はかなり高いものと思われる。

更に、續く劉備が四郡を取る部分はほぼ『演義』と内容を同じくするが、文言はあまり一致せず、しかも『三國志平話』には登場するが『演義』には見えない劉備の部將鞏固が6－4に登場することなどから考えて、やはり先行作

品の流用が想定される。候補となるのは『曲海總目提要』巻四十五に見える『四郡記』であろう。續く劉備の結婚物語については、多く『草廬記』『錦囊記』（『曲海總目提要』巻四十四に見える）に基づく。[19]

また、6－22の周瑜の死の場面は、『草廬記』第四十六折と一部合致はするものの、完全に同じというわけではなく、『綴白裘』初編に見える『西川圖』「蘆花蕩」とほとんど一致し、しかも附表の備考欄に記したように『鼎峙春秋』の方が古形を留めているものと思われる點からして、『西川圖』に依據するものと思われる。とすると、續く蜀奪取のくだりにも『西川圖』に基づく部分がかなり含まれているように思われるが、『西川圖』は題名とは異なり劉備の結婚を題材としていたらしく、[20]このくだりには『演義』と一致するセリフが多い點から考えて、『演義』に依據して創作された可能性が高いものと思われる。

そして、劉備が蜀に入って以降の部分については、先行する演劇作品の流用はほとんど認められなくなるのである。特に、九本と十本で延々と展開される南蠻征討の物語については、『七勝記』（『古本戲曲叢刊二集』所收）という先行作品が存在するのだが、『鼎峙春秋』がこの戲曲を參考にした形跡は全く認められない。

以上が『鼎峙春秋』における先行演劇作品流用の狀況である。ここまでの記述ですでに明らかになったように、全體に『演義』を踏まえる中で、先行作品を踏まえている部分については、『演義』と異なる内容、それも多くは『三國志平話』や雜劇と一致する内容が認められる。從って、これまで見てきた部分以外にも、2－20の侯成が呂布を諫めて處罰され、馬を盜んで曹操のもとに走る場面のように、『演義』ではなく『三國志平話』と一致する部分についても、[21]他の先行作品を想定すべきかもしれない。

四

以上述べてきたことから、『鼎峙春秋』がどのような方法で作られたのかという先に提示した第一の疑問に對する答は、おおむね明らかになったといってよかろう。

最後の部分を別にすれば、『鼎峙春秋』は基本的に、劉

關張の物語を軸にして、先行作品を貼り合わせることによって作られている。具體的には、第一本は『桃園記』と『連環記』、第二本は『連環記』と『胡笳記』？、第三本は『射鹿記』？と『古城記』、第四本は『古城記』と『草廬記』、第五本は『草廬記』と『赤壁記』？、第六本は『赤壁記』・『四郡記』？・『草廬記』・『錦囊記』・『胡笳記』？・『西川圖』がモザイクのように組み合わされ（推定の域を出ないものについては「？」を付した）、先行作品の流用だけではうまくつながらない部分については、新たに創作した場面を入れて、前後を接着しているのである。創作部分は、『演義』の本文を流用して作られている形跡が顯著に認められることから見分けることが可能である。こうした部分は、特に第四本・第五本において多く認められる。第七本になると、創作部分の割合が多くなり、第八本以降は、一部の例外を除いて、創作により成り立っているように思われる。にもかかわらず、この部分については、『演義』流用の形跡を見出しがたくなってくるが、その原因については後に述べたい。

さきに、『鼎峙春秋』の中心はあくまで劉備・關羽・張飛であると述べた。その上で、なぜ時として劉關張とはあまり關わらない例外的な場面が詳しく語られるのかという問題提示をしたわけであるが、依據した先行作品を列擧してみると、その問に對する一つの答は自ずから浮かび上がってくるようである。

劉關張の物語は、『桃園記』『古城記』『草廬記』において、まるで續き物のように語られていく。このことは、さきにふれたように、『遠山堂曲品』においてつとに祁彪佳が述べている通りであり、明末においては一般的な認識となっていたものと思われる。『鼎峙春秋』においてもこの三劇が基本として利用されたようである。

ただ、それだけではいくつかの問題が生じる。まず第一に、話が十分につながらない。「三戰呂布」「白門樓」などの話柄は、劉關張については不可缺のものといってよいが、これらについて語る以上、董卓・呂布の顚末を導入する必要がある。第二に、演劇的效果の問題として、三國志物語には女性の活躍が乏しい憾みがあり、長い上演を退屈させ

ないためにも、舞臺に華やかさを添え、勇壯な音樂ばかりではなく、優美な音樂をも導入するためにも、女性の登場場面を增やす必要がある。第三に、前述の三劇のうち、『古城記』は明らかに弋陽腔系統に屬するものであり、他の二劇についてもその可能性が高いように思われる。通常崑山腔と弋陽腔を混用する宮廷大戲の例から考えて、音樂の單調さを避けるために崑山腔系統の場面を插入する必要があったものと思われる。

『連環記』、それにおそらくは『胡笳記』が導入されたのは、右に述べたような理由によるものであろう。更に、そこにはもう一つ別の要因もあったものと思われる。

すでにふれたように、『鼎峙春秋』の最後の部分は、諸葛亮の南蠻征討と曹操が地獄の十殿を巡る物語が交互に語られる形を取っている。後に述べるように、この部分は『鼎峙春秋』の本質に關わる重要な意味を持つものと思われる。從ってその前には、曹操が地獄に落ちるだけの惡行が描かれねばならない。ところが、ここで問題になるのが宮廷演劇という狀況である。皇帝の前で、皇帝が迫害され、皇后が虐殺される場面を演じることはやはり忌避されるようである。それゆえ、伏皇后・伏完の殺害は演じられず、後に死後の彼らが登場してそのことが示されるのみである。ここに皇帝・皇后にかわって迫害され、非業の最期を遂げる者として、董承の物語が演じられなければならない必然性が生じる。これが『射鹿記』かと推定される先行作品が導入された理由であろう。

つまり、本筋である劉關張の物語以外の要素は、上演上の必要性ゆえに他の演劇作品が導入された結果であった。三國志物語における重要性を無視して、孫策や袁紹のことがほとんど語られない一方で、蔡文姫の物語が延々と演じられる理由はここに求められるであろう。

では、つなぎの部分はどのようにして創作されたのか。これまでにも何度もふれてきたように、先行する演劇作品に依據していないと思われる部分には『演義』を流用した形跡が認められる。つまり、先行作品の貼り合わせではうまくつながらない部分においては、『演義』の適當な部分を演劇化した齣を插入することによって接着していること

になる。逆にいうと、今は失われた先行作品に基づくのか、それとも『鼎峙春秋』制作時に新たに創作されたのかを判別しがたい場合には、『演義』に依據している程度が一つの指標になりうるということでもある。『演義』との關係を全く見出せない部分が『鼎峙春秋』成立時の創作になる可能性は、プロローグの部分と第九・十本を別にすれば、非常に少ないといってよい。

しかし、つなぎの部分も一度に制作されたとは考えがたい。その本文を仔細に檢討してみると、セリフと一致する『演義』のテキストが部位により異なるのである。多くの部分は嘉靖本もしくはそれと同系統のテキストと一致するのだが、一部嘉靖本とは異なり、毛本と一致する部分が存在する。この二つの部分は當然性格を異にするであろう。常識的に考えて、嘉靖本に一致する部分の方が先に成立し、後から毛本に一致する部分が追加された可能性が高いものと思われる。では、毛本と一致するのはどのような部分なのであろうか。

毛本と一致するのは次の各齣である。

3－1（青梅を煮て英雄を語るくだり）
3－4（獻帝が血詔を書くくだり）
4－17（劉備司馬徽に逢う・徐庶劉備に投じる）
4－22・23（三顧草廬と三顧草廬。『草廬記』と重ならない部分）
4－24（禰衡曹操を罵る）
5－1・2・3（博望燒屯）
5－7（長坂坡。『草廬記』と重ならない部分）
7－21（馬超劉備に降る。一部のみ）
8－8・10・12～15（龐德出征から關羽の死まで）
8－17・18（劉備陸遜と戰う）

4－17は劉備が檀溪を跳んで逃れた後、司馬徽のもとを訪れるところから、趙雲の出迎えを受けて歸り、徐庶と出會い、彼を軍師として迎えるまでの一連の出來事を一氣に演じるものであり、おそらく前後の物語を接續するつなぎとして作られた可能性が高いものと思われる。また4－22・23と5－7は、明らかに『草廬記』に依據した場面に

おいて、『草廬記』にはない部分で毛本が利用されている。一般的にいって、傳奇のセリフやト書きは比較的貧弱であることが多い。これは、うたに重點を置いているためか、あるいは不十分な部分は役者が上演の際に適宜補うことになっているためか、もしくはその雙方に由來するものであろう。『草廬記』のセリフも、そうした例に漏れず簡單なものである。そこで、ある時點で『演義』に添う形でセリフを增補しようという加工が施されたのであろう。

つまり、以上の場面については、他より遲れて追加もしくは修正を加えられた部分である可能性が高いことになる。とすれば、その段階で利用された『演義』のテキストが毛本だったということで說明は可能であろう。では、その他の部分はどうなのであろうか。

第八本の一連の場面については共通していえることがある。これらの場面においては、關羽と劉備の敗北と死が描かれているのである。神である關羽の死が非常に忌まれることは周知の通りである。[22]『鼎峙春秋』においては、概して劉備たちにとってマイナスの部分は避けようとする傾向がある。無論、これなくしては話が成り立たない千里獨行や長坂坡の前提となる劉備の敗北は描かれざるをえないが、呂布に劉備が徐州を奪われる場面は、劉關張にとっては重要な場面であるにもかかわらずほとんど無視されており、また張飛の死も描かれることはなく、セリフでさりげなく言及されるだけである。どうやら淸の宮廷の人々は、劉關張が苦しむ場面や死ぬ場面は見ることを好まなかったように思われる。

以上の事實と、本文が毛本によっていることから考えると、これらの場面は初めの段階では存在せず、後で付け加えられた可能性が高いのではないかと思われる。しかも、それでもなお關羽と劉備が敗北する場面自體は舞臺上で演じられることなく、前者は劉備、後者は諸葛亮によって敗北の豫感が述べられ、次にはすでに敗北した後で、前者においては關羽の靈、後者においては床についた劉備が現れるのみなのである。やはり、淸朝宮廷演劇においては彼らの敗北は演じてはならないものだったのではあるまいか。

3－4についても同樣のことがいえよう。前述したよう

に、皇帝の迫害は宮廷では演じにくい題材だったようであるが、董承の物語を語る上ではやはりここは缺かすことのできない部分である。後からこのくだりが追加されたのではなかろうか。

では、第五本のいわゆる「博望燒屯」のくだりはどうであろうか。この點については確かなことはいえないが、『草廬記』にも該當する部分があるにもかかわらず全く一致しない點から考えて、當初は『草廬記』を流用していたが、内容に不滿があって新しい内容のものに差し替えた可能性が考えられよう。散齣集『樂府萬象新』に引かれる『青梅記』（他の目錄類にも名は見えず詳細は不明）と最初の部分のみ一致する3－1についても同樣のことがいえよう。4－24は、先にも述べた10－2・3において冥界で死後の禰衡と曹操が登場し、太鼓を打ちつつ曹操を罵る場面を再演することと呼應させるために插入された可能性が高いであろう。もしそうであるとすれば、10－2・3の插入時期も遲れる可能性が高いことになる。『鼎峙春秋』においては、曹操の地獄巡りの内容と、それ以前に演じられていた現世での物語とをできるだけ符合させようという意圖が明らかに認められるのである。

以上のように、第八本までの『鼎峙春秋』（嚴密には第八本の末尾を除く）は、先行作品を組み合わせることによって劉關張の物語を語り、劉關張とはあまり關わりがない先行作品についても彩りとなるものは適宜加え、不十分な部分やつながりが悪い部分を『演義』に基づいて新たに創作した場面で埋めていくという手法で制作されている。今回問題にしている『古本戲曲叢刊九集』所收のテキストに關していえば、おそらくその作業は一度に行われたのではなく、一度できあがったものに『演義』毛本に基づく改變が少なくとも一度は加えられているものと思われる。流用されている先行作品の中にも、この時に新たに加えられたものがあるかもしれない。『胡笳記』かと推定される部分などは、特に存在しなくてもストーリーには影響しない以上、當初からあったか、後から加えられたかは判然としない。

この分析の過程で、さきにあげた疑問のうち、なぜ劉關張とはあまり關連のない部分が見られるのかという點につ

いては、おおむね明らかになったといってよいであろう。ではもう一つの疑問、なぜ第九本と第十本において南蠻征討が延々と演じられ、南蠻歸服をもって全篇が終わるのかということ、そして更に、なぜ南蠻征討の物語とほぼ同じ比重をもって曹操の地獄巡りを中心とする死後の世界の物語がやはり延々と語られねばならないのかという點についてはどうであろうか。この點を論じるためには、これもさきにあげた第二の視點、『鼎峙春秋』は何のために作られたのかという方向から考えることが必要となる。

五

『鼎峙春秋』の本來の物語は、8－20の劉備の死によって基本的に終わる。從って、これ以降はいわば本筋が終わった後のおまけという形になるわけであるが、實はこの部分にこそ『鼎峙春秋』の本質が隱されているのである。

性格の變化は、第九本に始まるというわけではなく、第八本においてすでにそうした動きが認められる。「單刀會」の場面である8－1に續いて、8－2～4において、劉備が諸葛亮以下の臣下の勸進を受けて蜀王の位につく次第が演じられる。『演義』ではまず王の位につき、曹丕が禪讓を受けたと聞いて帝位につくという順序になるわけであるが、『鼎峙春秋』においては、劉備はここで帝位は拒否して王位につくものの、內容的には大まかには『演義』における皇帝卽位の次第に近く、舞臺で演じられる一連の儀式も皇帝への卽位を思わせるものである。

本劇では劉備が曹操に先立って死んでしまう以上、曹丕の簒奪後に卽位するわけにいかないのは當然ではあるが、ここであえて皇帝ではなく王としているのは、眞の皇帝の前で皇帝への卽位式を行うことが不穩當だからであろう。實際これ以降、言葉遣いなどの點においても劉備は皇帝としてふるまい、他からもそう扱われることになる。

そして、この三齣の內容は、先に述べたように設定上『演義』に近い要素は持つものの、文言その他で『演義』と合致する要素は全く認められないのである。特に內容の性格上多く讀み上げられる文書類は、これ以前の部分においては『演義』のものを流用する傾向が認められたのとは

一變して、『演義』と全く一致しない。そして、それほど演劇的に興味深いとも思えない即位の次第が延々と演じられる。

この部分はおそらく創作になるものであろう。なぜこのような場面が作られねばならなかったのであろうか。

これ以降も、第八本の大部分が毛本によっていることは前に述べた通りである。つまり、いずれもおそらく創作になり、しかも後で手を加えられている可能性が高いことになる。そこで演じられるのは、關羽が死んで神となることと、劉備の死である。

そして、8－20における劉備の死を受けて、8－21からは異なった段階に入る。この齣で東嶽大帝が「上帝」に上奏して曹操を處罰することを許可され、22で「九鬼」に捕らえられた曹操は、23で伏完（彼が殺されたことは本劇では演じられていない）・董承・馬騰によって陰司へと連れ去られ、24で許褚・張遼ともども裁きを受けることになる。

第九本の初めは、まだ本筋の名殘の部分である。9－1で陸遜が八陣圖に阻まれること、9－2で劉禪即位、9－4で孫夫人投身のことが演じられ、ここで本筋は最終的に終了する。途中にはさまれた9－3と次の9－5は曹操の地獄巡りの續きであり、9－6からは諸葛亮の南蠻征討が始まって、以下9－23まで續き、第九本最後の9－24で今度は董卓も加わっての曹操地獄巡りに戻る。

第十本は、漢の獻帝が仙界で裴航ら戀愛物語に關わる仙人たちの立ち會いのもとに伏后・董妃と團圓し、劉晨・阮肇らの出迎えを受けて天臺山のパラダイスに赴くという10－1に始まり、以下前述の10－4・5における『四聲猿』の引用も含めた曹操の地獄巡りと、諸葛亮の南蠻征討が交互に演じられる。10－18・19における南蠻の心服と、10－20における諸葛亮の凱旋で南蠻征討は終わり、10－21で忠臣義士（なぜか何進・華陀なども加わっている）は昇天し、奸臣（曹操・董卓のほか曹操・董卓配下の主要人物がそろう）は輪廻に入って畜生に轉生する。最後に、10－21・22で關羽が伏魔大帝になって天界を巡り、さまざまな「魔」を降し、10－24で三教の神々（佛教が首位に置かれている）とその配下が皇帝を讃えるうたを唱って踊る。この最後の場面は、

1－1のプロローグと呼應するが、三國志との關係は、わずかに伏魔大帝＝關羽が顔を出すことに認められるにすぎない。

そしてこれらの場面について最も特徴的なのは、すでに述べた10－4・5を除いて先行作品の利用が認められず、『演義』に基づきつつ直接的な流用の形跡もないということである。また、南蠻征討については紀振倫作といわれる『七勝記』という傳奇が現存する（『古本戲曲叢刊第二集』所收）が、前述の通りこの作品とも全く文言が一致しない。つまり、『演義』には存在すべくもない曹操地獄巡りの物語はもとより、『演義』では詳細に語られる南蠻征討の物語も、『演義』本文や先行作品をそのまま流用したものではなく、『演義』によりつつも全く獨自に創作したものと思われるのである。これは、劉備の死までの制作態度とは根本的に異なるものといえよう。

これは、この部分が他とは異なった時點で成立したことを示すものであろうか。もとよりその可能性は否定できないが、ただ、ここで問題にしているテキストに關する限り、最後の場面が最初のプロローグと呼應すること、曹操の地獄巡りの內容がそれ以前に演じられている場面と密接に結びついていることなどから考えて、この部分とそれ以前の部分とが緊密な關係を持った一つのまとまりとなっているように思われる。

しかも、『演義』にならって諸葛亮の物語が語られるように見せて、物語は南蠻を心服させた諸葛亮の凱旋に終わり、『演義』においては最も重要な場面の一つであるはずの五丈原のことは一切語られず、司馬仲達も登場しない。つまり、すでに再三述べてきたように、『鼎峙春秋』はあくまで劉關張の物語なのであって、諸葛亮は主たる關心の對象ではないのである。

では、なぜここで南蠻征討の物語が語られねばならないのか。しかも、『鼎峙春秋』で取り上げられている三國志の様々な物語の中で、南蠻征討ほど詳しく演劇化されている部分は他に存在しないのである。「千里獨行」や赤壁の戰いといえども、その詳細さにおいて南蠻征討には遠く及ばない。本劇は南蠻征討を描かねばならなかった。しかもそれは、これも異様なほど執拗に語られる曹操が天罰を受

ける物語と同時進行で展開するものであった。

では、南蠻征討の中ではどの部分に重點が置かれているのであろうか。注意されるのは、10－17から19まで三齣にわたって、南蠻が諸葛亮の德に服して反逆をやめる次第が描かれていることである。17が「自此南人不復反」、18が「卽今荒徼盡來王」と題されていることは特に興味深い。その後、更に二回にわたって凱旋が描かれることになる。

この事實と、清朝宮廷において『鼎峙春秋』が上演されていた時期とを考え合わせると、南蠻征討の物語が持つ意味が浮かび上がってくる。前にふれたように、本劇は乾隆帝のお聲掛かりによって制作された。そして、乾隆帝が數々の外征に勝利を收めたことを誇って「十全老人」と號したことは周知の通りである。つまり、物語が一應終結した後に、外征の勝利と被征服民の心服を內容とする南蠻征討の物語をくどいほど念入りに描く部分を付け加えたのは、乾隆帝自身の征服事業に重ね合わせるためだったのではないかという推定が成り立つ。他の部分は、先行作品の流用や、『演義』の本文をそのまま用いて、かなり手輕に制作されたように思われるのに對し、この最後の部分だけは、內容が『演義』とほぼ同じであるにもかかわらず、ほとんどその文言を用いた形跡がない點から考えて、おそらくかなり力を入れて創作したものと思われることも、南蠻征討が『鼎峙春秋』の中で特別な意味を持つ部分であったことを示唆していよう。

そして南蠻征討の物語は、曹操一統の地獄巡りと畜生への轉生の物語とないまぜにして語られる。なぜここで曹操の地獄落ちの物語が必要なのであろうか。

曹操が奸臣として地獄に墮ちる以上、正當な皇帝は獻帝、それに續いて劉備ということになる。この視點からすれば三國志は、正當な皇帝が奸臣に虐待され、かわって新たな正當な皇帝が卽位する物語ということになる。御前ゆえに直接的描寫は避けながらも、董承らの物語によって曹操による獻帝虐待を執拗に描くことは前者のあらわれであり、劉備の卽位がひどく入念に、しかも『演義』とは違う形で描かれることは後者のあらわれであろう。それゆえ、『演義』とは異なり、劉備は董承の企みに參加しないことにな

る。新たな正當な皇帝が、前の正當な皇帝を救う企みに參畫していながら自ら卽位することには問題があるからであろう。そして、前述の通り劉關張の敗北や死を舞臺上で演じることが避けられるのもそのためであろう。正當な皇帝である劉備は、ある意味で清朝皇帝の分身としての役割を擔うからである。

そして、最後の部分で曹操及び董卓とその配下の者たちは、ひどく念入りにそれまでの物語をなぞる形で罰を受け、一方正當な皇帝の後繼者である劉禪は南蠻を服屬させ、南蠻の人々は自治權を認められて平和を喜ぶ。そして獻帝は死後仙界に迎えられて、天臺山のユートピアに赴く。これは、正當な皇帝に從わない者と服屬する者とがたどる運命の差を示すものであり、ここにおいて三國志物語は、正當なる皇帝の權威を示す寓話に讀み替えられるのである。

では、『鼎峙春秋』はどのような軍事行動を承けて作られたのであろうか。これは本劇が上演された年代に關わる問題でもあろう。先に見たように、作者とされる莊恪親王の活動期間を基準にすれば、『鼎峙春秋』の成立時期は乾隆七年（一七四二）から三十二年（一七六七）の間ということになる。この時期の軍事行動で、南蠻征討の物語と地理的にも符合するものとしては、乾隆十四年（一七四九）における四川の土司大金川の征討があげられよう。事實、『清史稿』卷五一三「土司二」に見える次の記事は、諸葛亮の南蠻征討を思わせるものである。

莎羅奔乞降於鍾琪、鍾琪輕騎徑赴其巢、賊大感動、頂佛經立誓聽約束。次日、鍾琪率莎羅奔父子坐皮船出洞詣大軍、莎羅奔等叩顙、誓遵六事、歸各土司侵地、獻凶酋、納軍械、歸兵民、供徭役。乃宣詔赦其死。諸番焚香作樂、獻金佛謝。

莎羅奔（大金川の土司）は岳鍾琪（清將）に降伏したいと申し出た。鍾琪が輕裝でまっすぐ莎羅奔の根據地まで行くと、賊は大いに感激して、佛經を頂き、命に從うことを誓った。翌日、鍾琪は莎羅奔父子を連れて皮の船に乘って洞を出ると、官軍のもとに向かった。莎羅奔たちは叩頭して六つの條件を守ることを誓い、各土司から奪った土地を返し、凶惡な族長を引き渡し、

武器を差し出し、捕らえた兵士や民を返し、徭役を提供することとした。そこで詔により死罪を免ずることにした。蠻人たちは香を焚いて音樂を演奏し、金佛を獻上して感謝した。

従って、『鼎峙春秋』は乾隆十四年より少し遅れる時期に制作・上演された可能性が高いものと思われる。

ただし、すでに述べたように、本劇は一度に作られたものではなく、改變を經ている形跡が認められる點からすれば、制作・上演のきっかけとなった軍事行動も一つではない可能性がある。ただ、演じられるのが南蠻征討である點には一定の意味を見出すべきであろう。乾隆帝の外征のうち、ビルマ・ベトナム方面に對するものは必ずしも成功とはいえず、東南アジア諸國については一應の戰勝の後朝貢國としたのみである。これは、『鼎峙春秋』において諸葛亮が孟獲をあえて滅ぼそうとせず、心服させて地元の支配を任せることと符合していよう。もしかすると、『鼎峙春秋』には乾隆帝の南征が十分な成功を收めえず、支配權を確立できなかったことを美化する意圖があったのかもしれない。

六

以上で、『鼎峙春秋』の制作過程と制作意圖はおおむね明らかになったといってよいであろう。しかも分析の過程で、『桃園記』『胡笳記』『射鹿記』『赤壁記』ではないかと推測される今は失われた一連の演劇作品の內容がある程度明らかになった。そして、これらの演劇作品の內容は、『演義』の原型となった三國志物語の原型がどのようなものであったかを考える上でも、重要なヒントを與えてくれるのである。

通常演劇・藝能には、民間で傳えられていた物語の內容がかなり後まで殘されるものである。三國志の場合も例外ではない。『鼎峙春秋』に殘されている先行演劇作品の內容には、『演義』における不自然な設定や展開を說明する鍵になりうるものが含まれている。最初にも述べたように、その點で『鼎峙春秋』は『演義』研究を進める上でもかけがえのない價値を持つものといえよう。この點については、稿を改めて論じることとしたい。

註

① 小松謙「清朝宮廷大戯『如意寶册』について」（『和漢語文研究』第八號〔二〇一一年十一月〕）。

② 『鼎峙春秋』については複數のテキストの存在が知られているが、今回は『古本戯曲叢刊』九集所收のテキストに限定して調査を行った。異本との關係については、別の機會に論じたい。

③ 第三本は二十三齣、第七本は二十五齣、また第五本は二十四齣となっているが、實は第五齣を缺く。各齣の標題が二齣單位で對句になっていることから考えて、本來齣數が奇數だったとは考えられず、これはおそらく後述するように、『古本戯曲叢刊九集』所收のテキストが後である程度の改變を經たものであることを示していよう。

④ この點については、小松謙『四大奇書の研究』（汲古書院二〇一〇）第二部第三章「『三國志演義』の成立と展開について――嘉靖本と葉逢春本を手がかりに――」參照。

⑤ 『清史稿』卷二一九「諸王五」の本傳による。

⑥ 南曲系の演劇作品については、「傳奇」「戯文」「南戯」など樣々な呼稱があり、それぞれの呼稱が一定のイメージを伴うため、用語の選擇に問題が生じやすい。本論においては、比較的廣い範圍で使用されていると思われる「傳奇」という語を、南曲系演劇作品の總稱として使用する。

⑦ 竹林本については、『續修四庫全書』（上海古籍出版社二〇〇八）のテキストによる。

⑧ 土屋育子「元雜劇テキストの明代以降における繼承について」（『日本中國學會報』第五十六集〔二〇〇四年十月〕）。

⑨ 散齣集については、土屋育子「明清刊散齣集の收錄演目に見られる特徴について」（『佐賀大學文化教育學部研究論文集』第十六集第二號〔二〇一二年一月〕）を參照した。附表のものも含めて、一連の散齣集は、『大明天下春』『樂府玉樹英』『樂府萬象新』については『海外孤本晩明戯劇選集三種』（上海古籍出版社一九九三）、その他は『善本戯曲叢刊』の各集（臺灣學生書局一九八四～八七）所收の影印による。

⑩ 異同の詳細については、赤松紀彦ほか『元刊雜劇の研究三奪槊・氣英布・西蜀夢・單刀會』（汲古書院二〇〇七）の「單刀會校勘表」（土屋育子作成）參照。

⑪ 于小穀本については、小松謙『中國古典演劇研究』（汲古書院二〇〇一）Ⅱの第二章「『脈望館抄古今雜劇』考」參照。

⑫ これらの點については、「明末清初における戯曲選本の纂輯――明刻清康熙間重修本『綴白裘合選』について――」（『中國文學論集』第二十五號〔一九九六年十二月〕）に始まる根ヶ山徹氏の一連の論考に詳しい。

⑬ 『風月錦囊』については孫崇濤『風月錦囊考釋』（中華書局二〇〇〇）、また「三國志大全」については上田望「明代における三國故事の通俗文藝について――『風月錦囊』所收『精選續編賽全家錦三國志大全』を手掛かりとして――」（『東方學』第八十四輯〔一九九二年七月〕）に詳しい。

⑭ 詹氏進賢堂について孫崇濤前掲書は、建陽の詹氏が江西に出した支社である可能性に言及している。

⑮ この點については、上田望⑬前掲論文に言及がある。

⑯ 中川諭『『三國志演義』版本の研究』（汲古書院一九九八）。

⑰ 片倉健博「『草廬記』の構成について――『三國志演義』及び雜劇との關連を中心に――」（『三國志研究』第四號〔二〇〇九年九月〕）。

⑱ 小松謙④前掲書及び井口千雪「『三國志演義』の原初段階における成立と展開――段階的成立の可能性――」（『和漢語文研究』第八號〔二〇一一年十一月〕）。

⑲ 本論文脱稿後、日本大學非常勤講師の片倉健博氏から『傅惜華古典戯曲珍本叢刊』（學苑出版社二〇一一）に『東吳記』全八出が收められており、末葉に「錦囊記」と記されていること、八出のうち第二・三・四・五出がそれぞれ『鼎峙春秋』の6－4・8・10・11と文言までおおむね一致し、第八出も張飛・黄忠・魏延が漁師に扮するところは『鼎峙春秋』6－16と一致することをご教示いただいた。おそらく『東吳記』は『錦囊記』から一部を抜き出したもので、これらの齣は『錦囊記』に基づくことになるであろう。本文・表におけるこれらの齣に關する記述は、初校段階で片倉氏の指摘に基づいて修正したものである。

また片倉氏からは更に『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏中文善本書志』（廣西師範大學出版社二〇一一）の清抄本『西川圖』についての記述によれば劉備の結婚が主たる題材であることもご教示いただいた。筆者は、題名から蜀攻略を主たる内容としているものと考えていたが、この指摘により本文・表の記述を改めた。この題名はいささか不可解であるが、片倉氏は、『曲海總目提要』が蜀攻略を題材としているように書いている點から考えて、同題の作品が二つ存在したか、あるいは『東吳記』が別名『錦囊記』、『西川記』が別名『錦繡圖』であることから、「錦」という字に引きずられて誤った可能性もあるかとしておられる。筆者も基本的にこの意見に贊成であるが、とりあえず蜀攻略の部分の本文がほぼ『演義』に沿っていることを考慮して、この部分に對する『西川圖』の影響は想定しないこととした。片倉氏の見解は追って論文の形で明らかにされるものと思われる。ここに謝意を表させていただきたい。

⑳ 前掲注⑲參照。

㉑ 京都府立大學大學院生井口千雪氏のご指摘による。

㉒ この點については、小松謙『中國古典演劇研究』（汲古書院二〇〇一）Ⅰの第二章「元刊本考」參照。

本論文は、平成二十三年度科學研究費補助金・特別推進研究課題番號二〇〇〇一〇〇一「清朝宮廷演劇文化の研究（代表者：磯部彰）」及び基盤研究C　課題番號二二五二〇三八一「『四大奇書』の研究」の成果である。

原據との關係・特徵的ト書き・曲の問題	流用／創作	備考	本文對比
衆扮靈官從福臺祿臺壽臺上跳舞科下衆扮十八天竺羅漢雲使上龍從雲兜下虎從地井上合舞科・收萬國咸寧區科	創作		
場上設香几內奏樂扮八開場人捧爐盤執如意從兩場門分上	創作		
二夫人登場など傳奇の類型に近い。あるいは基づくところあるか	桃園記？	劉備二夫人當初より登場	
風月錦囊に見えるのは耍孩兒一曲のみ	風月錦囊	風月錦囊を參考にしたか、もしくは風月錦囊の原據によるか	
	桃園記？	熊虎登場。北曲だが歌唱者は複數。演義とは全く無關係。依據するところあるか。次齣と連續？『桃園記』か	
	桃園記？	一人獨唱だが、內容は前齣と連續。あるいは雜劇の轉用？『桃園記』か	
	風月錦囊	『桃園記』か	
作細樂雜扮功曹曲內乘雲兜下焚疏接疏科仍上雲兜下（三回繰り返す）風月錦囊に見えるのは八聲甘州三支のみ	風月錦囊	前齣に續く。あわせて風月錦囊またはその原據によるか。原據は桃園記の可能性も	
	桃園記？		
	桃園記？	張梁と張寶を殺してしまう	
劉焉のもとで辭令を受けるという設定	桃園記？		
セリフまですべてほぼ一致	連環記		
はじめの四將の會話以外セリフまで同じ・竹林本に一致？	連環記		
セリフまで竹林本に一致	連環記		
山歌の位置以外セリフまで同じ・竹林本に一致	連環記		
節節高のみ曲辭異なる・他はセリフまでほぼ竹林本に一致	連環記		
位置異なる・セリフまでほぼ同じ・竹林本だが一部叢刊本に一致	連環記		

通算	齣	題		中心	曲牌(除引子)	聲腔	原據
1	1－1	五色雲降書呈瑞	佛說三國因緣	佛	普天樂・傾盃序・錦纏道・五福降中天喜・慶餘		なし
2	1－2	三分鼎演義提綱	開場	開場人	漢宮春		なし
3	1－3	樓桑村帝子潛踪	劉備出世	劉備	高陽臺×4・尾聲		?
4	1－4	涿鹿郡妖人爲暴	黃巾賊	黃巾	點絳唇・耍孩兒・三煞・二煞・一煞・煞尾	途中から北曲套	風月錦囊三國志大全6
5	1－5	韓秀才時行祭掃	關公出世	關公	粉孩兒・福馬郎・紅芍藥・耍孩兒・會河陽・縷縷金・越恁好・紅繡鞋・慶餘	南北合套	?
6	1－6	關夫子夜看春秋	斬熊虎	關公	點絳唇・混江龍・憶帝京・六么令・哪吒令・寄生草・青歌（哥）兒・上馬嬌煞	北曲套（關公獨唱）	?
7	1－7	萍踪合酒肆訂交	桃園結義	劉關張	駐雲飛×4		風月錦囊三國志大全4
8	1－8	蘭契投桃園結義	桃園結義	劉關張	八聲甘州×3・惜黃花×3		風月錦囊三國志大全5
9	1－9	兩叔姪新聯玉牒	劉焉認姪	劉備	榴花好（集曲）×3		
10	1－10	三弟兄大破黃巾	大破黃巾	劉關張	柳梢青・新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶得勝令・僥僥令・收江南・園林好・沽美酒帶太平令・慶餘	南北合套	
11	1－11	劉元德作尉安喜	門將傳命	劉備	梁州序×3・尾聲		
12	1－12	丁建陽起兵邠州	丁原起兵	連環	好事近×2		連環記4（起布）
13	1－13	議廢立董卓不臣	董卓議廢立丁原挑戰	連環	三捧鼓・一剪梅・園林好・江兒水・五供養×2・川撥棹・尾聲		連環記6（大議）
14	1－14	利金珠奉先背主	李肅贈赤兎馬	連環	天下樂・駐馬聽×2		連環記7（說布）
15	1－15	托乾兒丁原授首	呂布殺丁原	連環	桂枝香×2・縷縷金×2		連環記8（刺父）・9（反助）
16	1－16	拜義父呂布封侯	呂布封溫侯	連環	生查子×2・梁州新郎（集曲）×2・節節高・尾聲		連環記10（拜印）
17	1－17	董太師元夜張燈	董卓母子觀燈	連環	錦堂月（集曲）・醉翁子・僥僥令		連環記3（觀燈）

セリフまでほぼ一致・曹操の引子步蟾宮、連環記は二句のみ、鼎は四句・叢刊本と竹林本それぞれに近い部分あり	連環記		
セリフまでほぼ一致・叢刊本と竹林本それぞれに近い部分あるも竹林か	連環記		
13の集賢賓２支と白まですべて一致。猫兒墜２支と尾なし・竹林本か。歌の學習で前半はまとめ。	連環記	ここでは貂蟬と翠環はともに「一班女樂」・曲牌づくしのセリフ、ほとんどは北曲の曲牌	
	桃園記？	二夫人１－３のパターンに同じ・一度詩をとなえて退場し、賞宮花から次の場面・督郵の名は魏明	
登場の順序は許褚を除けばおおむね演義と同じだが文言は一致せず・曹操副から淨に（副は許褚）	？		
一部演義（嘉靖本？）と一致	桃園記？	袁紹の言葉は演義の盟書とその後のセリフを一緒にしたもの。華雄の描寫は嘉靖本に一致。ただし孫堅（副淨）が道化なのは雜劇に同じだが曲辭は異なる。先行作品あるか・劉備「安喜縣令」（次齣では「劉平原」と演義に同じ）	俺生來面如喋血、天然就虎體狼腰 嘉：　面如喋血、　虎體狼腰 毛：　虎體狼腰
演義とはあまり一致せず	桃園記？	尾聲のあとに太平令（第一本末尾ゆえ？）孫堅が張飛と賭けるのは單戰呂布と同じだが內容が不明確・酒を與えるのは曹操ではなく袁紹	
セリフまでほとんど同じ（結びのみ少し異なる）	連環記	楊鳳（呂布の部下。連環記・演義になし）・探子（雜）が主唱・呂布が韻文のセリフで受けて「喘息定了慢慢說來」（探子の定型）	
曲辭２支のみ同じ（沽美酒を調笑令とする）	連環記		
セリフまでほとんど同じ（結びのみ少し異なる。多少白を追加）	連環記	貂蟬が呂布に冠を贈ること、戲曲では理由あり	
セリフまでほぼ同じ・概ね竹林本に一致・引二句から四句に	連環記	王允の言葉演義に同じ（連環記も）	
初めの堂候の場面を除きほぼ同じ。閒に柳搖金を插入・竹林本に一致・丑（翠環）の吳語の白あり（連環記にはなし）	連環記	連環記の「大宴」なし	
初めの呂布と把門のやりとりのみ削除・叢刊本に一致？	連環記	貂蟬の引、後二句は叢刊本のみ	
ほとんど同じ・すべて竹林本	連環記		

18	1－18	王司徒私衛談劍	曹操借劍	連環	步蟾宮・錦纏道・步蟾宮・四邊靜×2		連環記11(議劍)
19	1－19	計不成曹瞞走馬	曹操刺董卓	連環	鎖南枝×2・孝南枝		連環記12(獻劍)
20	1－20	歌有習王允式環	貂蟬習樂・王允賜環	連環	清江引×2・西地錦・二郎神		連環記5(教技)・13(賜環)
21	1－21	鞭都郵縣尉掛冠	張飛鞭督郵	劉備	桂枝香×2・賞宮花・宴蟠桃・風入松×4		？
22	1－22	會虎牢驍騎傳檄	諸將投曹操	曹操	出隊子・傾盃玉芙蓉・朱奴兒・尾聲		演義？
23	1－23	抱忠憤歃血勤王	華雄敗孫堅	劉關張	粉蝶兒・好事近×2・太平令・出隊子×2・尾聲	南北合套	演義(嘉靖本？)？
24	1－24	奮神威停杯斬將	關公斬華雄	劉關張	解三醒（酲）・滴溜子×3・尾聲・太平令		？
25	2－1	中軍帳探子宣威	探子報劉關張威勢	連環	點絳唇・醉花陰・喜遷鶯・出隊子・刮地風・四門子・古水仙子・煞尾	北曲套（探子獨唱）	連環記16(問探)
26	2－2	虎牢關義師決勝	三戰呂布・單戰呂布	劉關張・連環	水底魚兒×4・調笑令・五馬搖金		後半曲辭は連環記17（三戰）
27	2－3	呂布私收東髮冠	董卓責辱呂布・呂布受冠	連環	桂枝香・琥珀猫兒墜・尾聲		連環記19(回軍)
28	2－4	貂蟬初試連環計	呂布初見貂蟬	連環	畫眉序×3・滴溜子×2・雙聲子・尾聲		連環記20(小宴)
29	2－5	貪美色中計納姬	董卓納貂蟬	連環	山坡羊・憶多嬌・鬬黑麻・柳搖金・普賢歌・好事近・不是路・掉角兒序・尾聲		連環記22(送親)・23(納妾)
30	2－6	應私情爭鋒擲戟	鳳儀亭董卓擲戟	連環	六么令・鎖南枝×2・紅衲襖×2・撲燈蛾×2・不是路・長拍・短拍・尾聲		連環記24(激布)・26(擲戟)
31	2－7	吐眞情虎賁助力	王允說服李肅	連環	啄木兒×2・歸朝歡		連環記27(計盟)

暗擡董卓切末放場上科・連環記29に假詔の部分なし。他本に存在？・最後の部分は連環記から離れる	連環記	董君雅（董卓の父）の魂が董卓の出發の際に暗上（連環記にはなし）	
入聲韻	胡笳記？	黄粹吾の『胡笳記』（遠山堂曲品）によるか・白多く後漢書・演義に一致	
	胡笳記？	『胡笳記』か・董祀は蔡文姫の夫	
	創作？		
王允の獻帝に對するセリフのみ演義に依據	？		
惜春の吳語の白(旦とするも丑？)	胡笳記？	『胡笳記』か・惜春と李旺が夫婦になる設定	
雜劇に基づく？（一人獨唱）	？		
雜扮太監隨意白	創作？		
	胡笳記？	尤侗「弔琵琶」第四折とは設定同じだが異なる・『胡笳記』か	
雜劇に基づく？（一人獨唱）	胡笳記？	雜劇？あるいは『胡笳記』か？	
苟彧の「二虎競食」、内容はほぼ演義に同じだが文言異なる	創作？		
演義とあまり一致せず	創作？		
劉備の密書演義（嘉靖本？）に近い・多くの場面を一氣に演じる・毛本14後半～19前半に當たる内容省略	？	候成が諫めて打たれ馬を盗むこと、演義になく平話に同じ。基づくところあるか	劉備の密書の「呂布狼虎之徒」、嘉靖本に「呂布乃狼虎之徒」とあるが毛本にはなし
セリフほとんど演義に同じ。異同少ないが嘉靖本？	創作？	貂蟬のことなし（末路不明）	容呂布口伸一言、死而無悔 嘉：容　　伸一言而死 毛：（なし）
演義と内容共通するも文言は特に一致せず	創作？		
演義(嘉靖本？)とセリフほぼ一致	創作？	吳の話をここでまとめて演じる	此非將軍哭泣時也。今天下未定、奸雄競起、豺狼當道、…猶開門而揖盗也 嘉：此非將軍哭時也。…方今天下未定、…況今奸雄競起、豺狼滿道、…猶開門而揖盗 毛：此非將軍哭時也。

32	2－8	傳假詔梟賊燃臍	誅董卓	連環	望吾鄉・神仗兒・望吾鄉・春柳娘×4		連環記28（假詔）・29（誅卓）
33	2－9	蔡邕感舊陷囹圄	王允囚蔡邕	蔡邕	女冠子・畫眉序		？
34	2－10	董祀乞骸歸寔穿	蔡邕囊首死・董祀收屍	蔡邕	新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶太平令・僥僥令・收江南・園林好・沽美酒帶太平令・尾聲	南北合套	？
35	2－11	邀赦書餘孽稱兵	李郭起兵	李郭	尾犯序・駐環看		
36	2－12	衛京城孤忠殉節	王允殉節	王允	水底魚・粉蝶兒・好事近・石榴花・好事近・鬬鵪鶉・撲燈蛾・上小樓・煞尾	南北合套	演義？
37	2－13	掠兩郡右賢獲艷	右賢王掠蔡文姫	蔡文姫	點絳唇・清江引・集聽黄鶯・簇御林・水底魚		？
38	2－14	鼓三軍孟德勤王	曹操起兵	曹操	點絳唇・端正好・滾繡毬・倘秀才・叨叨令・煞尾	北曲套（點絳唇以外許褚獨唱）	？
39	2－15	癡虎迎鑾幸許都	曹操迎獻帝	曹操	鎖南枝×5・滴溜子		？
40	2－16	文姫止輦弔青塚	蔡文姫弔王昭君	蔡文姫	普天樂・玉芙蓉・尾聲		？
41	2－17	感同調明妃入夢	王昭君入文姫夢	蔡文姫	新水令・駐馬聽・雁兒落・得勝令・收江南・沽美酒・太平令・清江引	北曲套（清江引を除き王昭君獨唱）	？
42	2－18	送人情曹操致書	荀彧獻二虎競食計	曹操	三臺令・剔銀燈×2		演義？
43	2－19	尊有德陶謙讓州	陶謙讓徐州	劉備	臨江仙×2・宜春令×3		？
44	2－20	進讒言侯成受責	曹操圍呂布・侯成盜馬戟	呂布	畫眉序×2		演義（嘉靖本？）ただし平話と共通する内容を含む
45	2－21	白門樓家奴就戮	曹操誅呂布	呂布	掉角兒序・四邊靜・清江引×2・黒麻序・尾聲		演義（嘉靖本？）
46	2－22	黄金殿皇叔承恩	獻帝封劉備	劉備	出隊子・惜奴嬌序・駐雲飛×2		演義？
47	2－23	據江東兄終弟及	孫權繼孫策	孫權	鬬鵪鶉・繡停針・紫花兒序・四般宜・調笑令・憶多嬌・綿搭絮	南北合套	演義（嘉靖本？）

演義と内容共通するも文言は特に一致せず	射鹿記？	『射鹿記』（遠山堂曲品・曲海總目提要44）か？『青虹嘯』５もこの場面だが異なる・曹操が帝の弓を奪って射る設定演義にはないが、『青虹嘯』にはあり	
セリフ毛本に一致と嘉靖本等に一致と雙あるも基本は毛本	青梅記？	『樂府萬象新』巻三上段の『青梅記』（汪廷訥のものとは別）「曹操青梅煮酒」と曹操の登場詩及び泣顔回の初句のみ似る	被我心生一計…卽不識其面…劉表虛名無實…劉璋雖係宗室乃 嘉：被吾心生一計…不識者　…劉表酒色之輩…劉璋　乃 毛：　吾心生一計…旣不識其面…劉表虛名無閒…劉璋雖係宗室乃
	創作？		吾觀劉備閒時學圃、又復惧雷、此非成事業之人、何足憂也 嘉：吾觀劉備閑中學圃、醉後畏雷、亦非成業之人、何憂之有 毛：なし
	創作？		校尉來此何幹。…奉丞相之　命着俺前來請元德公回去共議行兵大事 嘉：校尉來此何幹。…丞相　命特來請將軍　回　別有商議 毛：公來何幹。…奉　丞相　命特　請將軍　回去別有商議
獻帝滾白・董妃滾白・詔書の内容ほぼ毛本に合致（葉逢春本はほぼ嘉靖本に同じ）	射鹿記？	青虹嘯６も同じ場面だが異なる。以下同じ。滾白あり、青陽腔系の演劇に基づくか。射鹿記？・詔書の内容が毛本に合致するのは本劇成立の段階で改められたものか	近者曹賊弄權、欺壓君父、結連黨羽、敗壞朝綱、勅賞封罰、不由朕主 嘉：近者權臣曹賊、…實有欺罔之罪、結連黨伍、敗壞朝綱、勅賞封罰、皆非朕意 毛：近日操賊弄權、…欺壓君父、結連黨伍、敗壞朝綱、勅賞封罰、不由朕主
（太監白）聖上賜你袍（隨意念虛白）・（春雪）滾白	射鹿記？	演義と文言一致せず、細部の展開も異なる	
吉平董承馬騰作啞？科	射鹿記？	馬騰とのやりとり演義と一致。葉逢春本が最も近く、毛本が最も遠い	面帶春色、非是有恙…曹公　乃國家梁棟、吾何能及也 葉：面帶春色、非有病者…曹丞相乃國之棟梁、吾何能及焉 嘉：面帶春色、非有病者…曹丞相乃棟梁也、吾何能及焉 毛：面帶春色、未見病容…曹丞相乃國之大臣、朝廷所倚賴
吉平滾白・一部のセリフ演義に一致し、葉逢春本に最も近い	射鹿記？	張遼知惠者	（張遼）自古道君用藥臣先嘗之、吾旣爲主公心腹、亦當先嘗而後進。（吉平）藥是好藥、過不得手 葉：操曰、君有疾飲藥、臣先嘗之…汝旣爲吾心腹之人、何不先嘗而後進。平曰、藥皆眞藥、何必先嘗。 嘉：操曰、汝知君有疾而飲藥、臣先嘗之、…汝心腹之人、何不先嘗。…（吉平のセリフなし） 毛：操起曰、…君有疾飲藥、臣先嘗之、…汝爲我心腹之人、何不先嘗而後進。平曰、藥以治病、何用人嘗
	射鹿記？		
吉平滾白・曹操滾白（ともに複數）・王子服打科虛白渾科下・一部のセリフ演義に一致し、葉逢春本に最も近い	射鹿記？	王子服道化。吳子蘭・吳碩・种輯ともども傍觀者（本劇末尾で种輯が忠臣義士とされることと矛盾）・董承が吉平を打つ展開は演義と異なる	汝罪過王莽、惡勝董卓、天下人皆欲啖汝之肉、何止我吉平也 葉：汝情過王莽、妄似董卓、天下人皆欲爭啖汝之肉、何止吉平乎 嘉：汝情過王莽、佞勝董卓、天下人民皆欲啖汝、　何止吉平一人乎 毛：（なし）

48	2－24	獵許田君弱臣強	許田圍獵	劉備	出隊子×2・新水令・胡十八・也不羅・錦上花・清江引		演義？
49	3－1	假小心閒雷失筯	煮青梅論英雄	劉備	好事近×2		青梅記？・演義（毛本）
50	3－2	眞大意縱虎歸山	郭嘉程昱諫曹操	曹操（劉備）	朝元令・縷縷金・出隊子×2		演義(嘉靖本？)
51	3－3	難追鐵甲三千騎	許褚追劉備	劉備	劉袞・朝元令		演義(嘉靖本？)
52	3－4	蜜（密）草椒一尺書	獻帝寫血書詔	獻帝	風入松×6	青陽腔系	演義（毛本）
53	3－5	賜衣帶血詔潛投	董承受血詔	董承	鎖南枝・生查子・江頭金桂（集曲）×2	青陽腔系	？
54	3－6	翊袞旒赤心共吐	董承吉平馬騰結盟	董承	駐馬聽×2・擺拍		演義(葉逢春本？)
55	3－7	未將國賊頭瘋療	吉平用毒被捕	吉平	降黃龍×2・黃龍滾×2・尾聲	青陽腔系	演義(葉逢春本？)
56	3－8	忽把謀臣心病鈎	董承馬騰聞報	董承	駐馬聽×2		？
57	3－9	抱忠憤誓死報君	拷吉平	吉平	出隊子・上馬踢・採茶歌・梁州錦序（集曲）・奈子五更寒（集曲）・梁州序	青陽腔系	演義(葉逢春本？)

春雲下、苗澤吊場科白	射鹿記？	苗澤、演義では秦慶童	
董承曲内下（伴奏がおわらないうちに？）・尾聲のあと北曲套に	射鹿記？		
馬超と韓遂の會話の内容は演義と同じだが文言は一致せず	？	演義では赤壁の後のこと	
	？		
大まかな内容は演義と同じだが文言は一致せず	？	馬超の話ここでとぎれる・青虹嘯21とは異なる	
後に續くはずの展開だが承けるものなし	射鹿記？	張遼悪役・吉邈逃走（後の伏線？）	
曹操登場の出隊子を青衲襖にかえ、張遼・許褚登場の鷓鴣天を削り、演義由來のセリフを加える・荀彧のセリフ、嘉靖本では荀彧、毛本では程昱。他も嘉靖本に一致		古城記	嘉靖本等に一致
曲はすべて異なるがセリフは合致。末尾で一部演義に合致するセリフ	古城記	報子の道化	
古城記と合致（曲辭はかなり異なる）・一部改變（劉備の悪口は削除）・６前半と７の第一駐雲飛は削除・第二駐雲飛を駐馬聽とする（同じなのは初句のみ）・８の張飛のうたは取らず・９の第一駐雲飛は削除・劉備滾白・張飛滾白	古城記	張遼軍師役・滾白古城記にはないが、同劇は『時調青崑』など青陽腔系散齣集に多く取られる	
曲二支のみ合致・二夫人滾白・關公滾白・端正好と倘秀才のみ合致・白は一部合致	古城記	報子の道化	
セリフのみ一部合致（許褚と驃丞のやりとりなど）・曲は異なる	古城記その他	『堯天樂』卷下の古城記「關雲長嫂叔權降」と『詞林一枝』卷二の「關雲長聞訃權降」（ほぼ同文）は、古城記とは寄生草が合致するのみで、他は異なる・『詞林一枝』「關雲長秉燭待旦」も驃丞の滑稽なセリフが合致するのみだが、古城記とはほぼ同じ・『風月錦囊』「三國志大全」の「江麋二婦下徐州」もほぼ同じだが『詞林一枝』に近い。古城記が改作版か・秉燭は各本（曲辭	

58	3－10	露姦情求首主	苗澤密告董承	董承	鎖南枝×2・四邊靜		
59	3－11	謀泄兩損匡國命	董承馬騰撞死	董承	步步嬌・園林好・錦衣香・漿水令・五更點×2・尾聲・一枝花・梁州第七・煞尾	青陽腔系？＋北曲套	？
60	3－12	痛深共起報讐兵	馬超聞耗	馬超	點絳唇・一江風×3・摧拍		演義？
61	3－13	誓中軍孤兒泣血	馬超起兵	馬超	四邊靜×3		？
62	3－14	逢劫敵奸賊髡鬚	馬超破曹操	馬超	山隊子・普賢歌・水底魚・普賢歌・水底魚・普賢歌・水底魚・普賢歌・水底魚・普賢歌・紅繡鞋・適溜子		？
63	3－15	弱息一絲延嗣續	張遼逼死吉平母妻	吉平一家	水底魚・榴花好・不是路・駐雲飛・香羅帶×2・風雲會四朝元（集曲）×2・金錢花・駐雲飛・金錢花		？
64	3－16	戰書三月下淮徐	曹操發兵討劉備	曹操（劉備）	青衲襖・皂羅袍×2		古城記3・演義（嘉靖本？）
65	3－17	莽張飛獻偷營計	張飛獻計	劉關張	新水令・開金四塊玉・喬木查・搗練子・慶豐年		古城記4
66	3－18	假曹操看子夜書	劉備張飛劫曹營敗走	劉關張	出隊子・淸江引・駐馬聽・駐雲飛・四邊靜・紅納襖・駐雲飛・靈壽杖	青陽腔系？	古城記5・6・7・9
67	3－19	遊說客較短論長	張遼說關公降	關公	桂枝香・端正好・倘秀才・靈壽杖・塞鴻秋	青陽腔系？	古城記10
68	3－20	秉燭人有一無二	關公權降・關公秉燭	關公	醉花陰・喜遷鶯・出隊子・刮地風・四門子・古水仙子・煞尾		古城記11・『詞林一枝』2・『堯天樂』下・『風月錦囊』「三國志大全」

		のみの『群音類選』12「五夜秉燭」も含む）とも闇五更の形式	
古城記の曲の一部を省略。收尾のみ異なる・他はほぼ同じ	古城記		
點絳唇・水底魚以外は曲牌異なるも同じ語を多く用い内容はほぼ共通・セリフは概ね同じ	古城記	劉備、顏良・文醜に八百長を依頼	
創作？セリフ嘉靖本に一致するも、徐晃の「你敢奪我的錦袍麼」は嘉になく毛には「汝敢強奪」あり。王朗・王粲の詩は嘉にあり（ただし後者は鍾繇とする）、毛になし	創作？	曹眞を避諱して曹子孝に・演義では赤壁の後	小將軍先射中、汝何奪之。　看我與汝兩個解箭。 嘉：小將軍先射、汝何奪之。　看我與汝兩個解箭。 毛：文烈　先射、汝何得爭奪。看我與你兩個解箭。
セリフは古城記を簡略化したもの・落梅風と播海令は古城記の滾繡毬×２とほぼ同じ	古城記	69の續き・張遼の計・長蛇陣出るも古城記の長い説明はない	
古城記に關しては一部曲牌名異なるも曲辭はおおむね同じだが、少し省略あり・基本古城記と同じだが、一部「義勇辭金」に合致	古城記・義勇辭金	基本は古城記と合致するも一部「義勇辭金」と一致。古城記の異なるテキストに依據するか・顏良が關公と對話するつもりでいたことは嘉靖本と同じ	駐馬聽　整頓上鮮血征袍烈火旂 太平令　投降的馬前拜跪 義：整頓下猩血征袍烈火旗 投降的戰篤速馬前齊跪 古：准備着朱雀南方烈火旗 なし
古城記になし。別本にあるか？	？		
趙雲の劉備に對する「仁兄」という呼びかけをすべて削除・古城記の劉備のセリフ「但我今腹中饑餓了、行走不上」がないにもかかわらず趙雲の「待我到村中買些酒飯與皇叔充飢」があり不自然（古城記に依據）・張飛の「御駕親征」など削除・古城記の張飛が二弟に昇格して趙雲を三弟にするというセリフを削るも末尾の詩の「撇了雲長得子龍」は殘る	古城記	趙雲、劉關張と虎牢關で別れ、劉表に身を寄せるも見限って青州に馬を買いに行った歸り（古城記では「領主上之命、前往青州買馬而回」）。内府本雜劇の馬商人という設定と合致。劉備の白馬は趙雲が贈ったもの	
引の新水令前半のみ古城記と合致。他の曲辭はほぼ「義勇辭金」とほぼ完全に一致するもセリフは異なる。合致度高く、直接朱有燉の曲辭によるか。曲辭のみ合致する點からすると『雍熙樂府』卷四によるか	古城記・義勇辭金		

69	3 －21	承燕會却物明心	關公退美女	關公	點絳唇・倘秀才・傍粧臺・寄生草・煞・二煞・收尾		古城記13
70	3 －22	剖金魚兵資孤客	劉備投袁紹	劉備	點絳唇・撻破歌・紅衲襖×２・水底魚兒		古城記14
71	3 －23	宴銅雀頌起羣僚	曹操宴銅雀臺	曹操	好事近×２・千秋歲・紅繡鞋		演義（嘉靖本？）
72	4 － 1	赤兎馬歸眞主控	曹操贈赤兎馬	關公	錦上花・新時令・撥不斷・落梅風・醉娘子・播海令		古城記15
73	4 － 2	青龍刀振壯夫殘	關公斬顏良文醜	關公	新水令・駐馬聽・大德歌・喬木查・沽美酒帶太平令・四邊靜・駐雲飛	北曲套（四邊靜以外は關公獨唱）	古城記16・朱有燉「義勇辭金」第二折
74	4 － 3	翼德據城賓作主	張飛占古城	張飛	水底魚兒・窣地錦襠・水底魚兒・節節高×３		？
75	4 － 4	子龍奪食弟逢兄	劉備逢趙雲張飛	劉備・張飛・趙雲	皀羅袍×２・駐馬聽・上小樓		古城記17
76	4 － 5	掛印封金尋舊主	關公封金	關公	端正好・滾繡毬・倘秀才	北曲套の前半（關公獨唱）	「義勇辭金」第三折・古城記18

關公の滾白・許褚のセリフが一部のみ古城記19と共通。曲は古城記20と一部共通するも、曲牌名が異なり、「義勇辭金」4とは初めの三曲が曲牌名も含めて一致・セリフは「義勇辭金」ではなく古城記と一致・『玉谷新簧』首卷「曹相覇橋獻錦」はほぼ「義勇辭金」に同じで二轉もなし・三轉を古城記は「滾」とするが、通常の滾調とは違い貨郎兒のスタイル・四轉は古城記の前腔つまり天下樂で「義勇辭金」にはなし。ただし實際の曲辭は前も含めて貨郎兒に合致・『雍熙樂府』卷五の點絳唇套「千里獨行」（『風月錦囊』にも見える）とは合致せず	古城記・義勇辭金	①「義勇辭金」と重なる部分は古城記より「義勇」に近いが完全に一致はしない。 ②曲牌名は古城記とは異なる。 ③比較的一致する部分が多いのは『玉谷新簧』だが、完全に一致するわけではない。ただし『玉谷』の滾調を受けている（八轉と九轉）ことは注意される。 　複雑な狀況だが、青陽腔系の古城記異本（劇名は違ったかもしれない）に依據するか・『八能奏錦』卷1に見える『五關記』「曹操覇橋餞別」は冒頭のみだが、新水令が古城記の賀新郎・本劇の九轉貨郎兒と一致	九轉貨郎兒（涼時節）・二轉（本待要下征鞍）・三轉（光閃閃）・四轉（猛聽得一聲高叫）・出隊子（曹操らによる）・五轉（您那心事兒）・六轉（恁道俺受恩）・七轉（多拜上二位尊嫂）・八轉（休得要胸懷）・九轉（俺本是南山豹） 「義勇辭金」：轉調貨郎兒（涼時節）・二轉（光閃閃）・三轉（我子見青蔭蔭：後半二轉と共通）・四轉（打這厮舌剌剌）・五轉（餞行酒）・六轉（寬度量）・七轉（關羽自河東）・八轉（炎漢室衰微時）・九轉（誰肯立孤忠）・煞尾（愁隨煙柳） 古城記20：賀新郎（涼時節＝九轉）・天下樂（本待要下征鞍＝二轉）・滾（光閃閃＝三轉）・前腔（忽聽得一聲高叫＝四轉）・出隊子（曹操らによる）・滾（又不知他有甚麽他になし）・前腔（傳言拜上二位＝七轉。義勇の五轉の順序を變えて使用）・滾（惱得我＝八轉後半と九轉） 『玉谷新簧』首卷：轉調鶴郎兒（（丑）涼時節（關）秋風八月＝九轉）・初轉更（光閃ヒ＝三轉）・曲牌名なし（本待要下征鞍＝二轉。鼎で滾白の部分が曲辭に）・三轉更（隱跡潛奔：他になし）・四轉更（猛聽得一聲高叫＝四轉。途中から五轉）・五轉更（因良將返故鄉：はじめは曹操唱で他になし。途中から五轉に一致）・六轉更（餞行酒＝義勇五轉）・七轉（俺自有寬度量廣＝義勇六轉）・前腔（他那里好意設＝義勇六轉の續き）・滾調（惱得我＝古城滾。八轉と九轉）
ほとんど同じだが八聲甘州以外の曲牌名異なる	古城記	形式が合致するのは鼎の曲牌名。修正したか別本によったか	
曲はほぼ同じ。セリフは演義に合わせて詳しくなっている	古城記		
ほぼ同じだが曲牌名異なり、セリフも近いが一部順序が異なる	古城記		
曲・セリフともほぼ同じ	古城記		
金錢花と前後のセリフのみ同じ・古城記に見える新水令以下の旦との互唱なし。この部分は『群音類選』12の『桃園記』「千里獨行」と一致し元來の『古城記』の曲辭ではないかもしれない	古城記		
粉蝶兒以下が古城記28に該當・古城記迎仙客が鬪鵪鶉、句格は鬪鵪鶉に近い・關公滾白・	古城記	軍校のセリフに古城記に基づくギャグを追加	

77	4－6	紅袍藥酒餞賢侯	曹操餞關公	關公	九轉貨郎兒・二轉・三轉・四轉・出隊子・五轉・六轉・七轉・八轉・九轉	青陽腔系？	「義勇辭金」第四折・古城記19及び20・『玉谷新簧』首卷
78	4－7	邂逅莊翁書別贈	胡華遇關公託書	關公	八聲甘州・哈哈令・醉奚婆・柳葉兒		古城記21
79	4－8	隄防關將命輕捐	關公斬孔秀韓福	關公	八聲甘州・甘州歌（集曲）		古城記22・23
80	4－9	淨國寺借酒作力	關公斬卞喜	關公	率地錦襠・新水令・駐馬聽近・錦上花×2・鴛鴦煞		古城記24
81	4－10	滎陽關漏風熄火	關公斬王植	關公	金錢花・駐雲飛		古城記25
82	4－11	棄盜投軍邪改正	關公斬秦琪・收周倉	關公	金錢花・駐雲飛・六么姐兒（集曲）・六么江水（集曲）		古城記26
83	4－12	閉城追戰弟疑兄	張飛拒關公	關公・張飛	駐雲飛・甘草子・粉蝶兒・醉春風・鬬鵪鶉・惜花賺・耍孩兒	北曲套・青陽腔系？	古城記27・28

古城記より曲數支少ない・『群音類選』12『桃園記』「古城聚會」とは一致せず			
古城記は一度尾煞の後端正好からこの齣と合致・古城記前腔（端正好）の途中から倘秀才、滾を滾繡毬とするも句格合わず	古城記	柳を切る力比べのエピソード、古城記のみ	
引、順序を變えて古城記の二犯令を使用・古城記途中から曲牌名を記さず	古城記	張飛請罪のエピソードあり	
	？	劉表「自虎牢關上孫堅背盟被吾所殺」「賢弟、自虎牢關一別、直至如今」・劉備、蔡瑁を用いぬよう進言	
作殺鷄求科	？	蔡瑁の三弟のうち蔡勳のみ君子・龍王の助け・的盧說明なしに言及・殺鷄求科	
演義（毛本）に基づく。複數の場面をまとめて處理	創作？	道童（丑）美文調のセリフ	忽爾生高抗……　久聞明公大名、　何故至今猶落魄不偶耶 嘉：忽有殺伐之調……　愚聞將軍大名久矣。何故區區奔走於形勢之途耶 毛：忽起高抗之調……吾久聞明公大名、　何故至今猶落魄不偶耶
演義に基づくが、版本の特定困難	創作？		
演義とは異なり、金鎖陣などなし	創作？		
	創作？		徐庶の梁棟云々と劉備の匡扶王室之心の語、毛本になし
引の高陽臺も同じ・懶書眉は草廬記三支の一支目のみを改變使用・草廬記の淘金令なく、水隊子は草廬記になし。セリフも前半はほぼ同じだが後半異なる	草廬記		
前半は草廬記・ただし草廬記は三度目にあたり諸葛亮に會って斷られる・初めの石・孟のやりとり草廬記になし・引の探春令は同じ（前半のみ）・山歌は草廬記では歌頭曲尾・後半は演義（毛本）・諸葛均の東甌令は演義の本文を曲に改めたようなもの	草廬記＋創作	草廬記は夏、本劇は冬。草廬記は諸葛亮に會うも斷られる・後半は演義（毛本）に基づく	二公誰是臥龍先生。（石廣元云）公乃何人、欲尋臥龍何幹……不省治國安民之事 嘉：二公何者是臥龍先生也。面白者曰、將軍欲尋臥龍何幹……不省治國之事 毛：二公誰是臥龍先生。長鬚者曰、公何人、欲尋臥龍何幹……不省治國安民之事
前半は草廬記とほぼ同じだが、諸葛均が現れてからは演義（毛本）、	草廬記＋創作	丑（童子）の四六まじえた長ぜりふあり・「生一子、該有四十年天下、爲此俺師傅便有出山之念」。草廬記で	南陽野人、疎懶成性、屢蒙枉臨、不勝愧赧 嘉：南陽田夫、觸事疎懶、屢蒙將軍

84	4－13	三度鼓停老將誅	關公斬蔡陽	關公	端正好・滾繡毬・倘秀才×２・滾繡毬・煞尾	北曲套・青陽腔系？	古城記28
85	4－14	一家人在古城聚	古城聚會	劉關張	新水令・駐馬聽近・喬木查・梅花酒・水仙子・得勝令・攪箏琶・離亭宴煞	北曲套	古城記29
86	4－15	惇敍聯茵張綺席	劉表設宴邀劉備	劉備	漁家傲・剔銀燈・攤破地錦花・尾聲		？
87	4－16	避危匹馬躍檀溪	劉備躍馬跳檀溪	劉備	好事近×２・撲燈蛾×５・尾聲		？
88	4－17	德操指引求名士	劉備遇司馬徽徐庶	劉備	江頭金桂（集曲）×２・桂枝香×３		演義（毛本）
89	4－18	元直安排破敵軍	徐庶用計斬二呂	徐庶	江頭金桂（集曲）・雙令江兒水（集曲）・六么令・駐馬聽×３		演義（特定不能）
90	4－19	將計就計取樊城	徐庶大破曹仁	徐庶	朱奴兒×２・朱奴剔銀燈（集曲）×２・水底魚兒×３		
91	4－20	知恩報恩薦諸葛	徐庶臨別薦諸葛	徐庶	新水令・折桂令・雁兒落帶得勝令・收江南・清江引	北曲套	演義（嘉靖本？）
92	4－21	知客來遊山先往	初顧草廬	諸葛亮	懶畫眉・字字雙・水隊子		草廬記３
93	4－22	求賢切踏雪重臨	二顧草廬	諸葛亮	山歌・大迓鼓・懶畫眉・西地錦・東甌令×２・窣地錦襠		前半草廬記８・後半は演義（毛本）
94	4－23	隆中振袂起耕夫	三顧草廬	諸葛亮	憶鶯兒（集曲）・宜春令×２・望吾鄉		前半草廬記11・中盤は演義(毛本)・後半はまた草廬記11

宜春令からまた草廬記に一致（セリフは少し異なる）		は博望燒屯と同様に後主の誕生を趙雲が報告し、諸葛亮は四十年天下之分と占って下山を決意・草廬記は夏末秋初、本劇は春	枉駕來臨、下情不勝感激 毛：南陽野人、疎懶性成、屢蒙將軍枉臨、不勝愧赧
貨郎兒を用いた長い北曲套だが演義（毛本）に基づく。五轉の内容も演義を曲に改めたもの	創作？	『四聲猿』「漁陽三弄」とは異なる・短歌行による歌舞あり・演義では吉平の前に置かれる。變化をつけるため？第四本の末尾ゆえ長い套數を置く？・セリフの一部（敗北の列擧）は演義の張松のセリフに依據	廟堂之上、何太無禮。　（禰衡白）欺君罔上乃爲無禮。吾露父母之形以顯淸白之體。 嘉：廟堂之中、何太無禮。　衡曰、欺君罔上以爲無禮。吾露父母之形以顯貞潔之人。 毛：廟堂之上、何太無禮。　衡曰、欺君罔上乃爲無禮。吾露父母之形以顯淸白之體耳。
セリフ演義（毛本）と同じ。草廬記12とは題材同じだが異なる	創作？	ここから韻を表記（先天・３齣まで）	近聞劉備在新野、 每日操演士卒、必爲後患。 嘉：近聞劉備在新野、拜孔明爲軍師、每日敎演士卒、必爲心腹之患。 毛：近聞劉備在新野、 每日敎演士卒、必爲後患。
北曲套で大部分一人獨唱だが演義（毛本）に基づく	創作？	演義間の異同少ないが、關公・張飛に與える軍勢が嘉靖本の一千五百人ではなく、毛本の一千人に一致・張飛反發のエピソードなし。『博望燒屯』２や草廬記13とは全く一致せず	
北曲套だが歌唱者は多様・セリフ演義（毛本）と同じ	創作？	セリフの多くは演義（毛本）に基づく。「博望燒屯」や草廬記13とは一致せず・張飛謝罪のことなし	自古道、欺敵者必敗。 南道路狹、……倘用火攻奈何。（于禁白）君言是也 嘉：　欺敵者必敗。禁曰……。 李典曰、南道路狹、……恐使火攻。 于禁曰、曼成之言是也。 毛：　欺敵者必敗。 南道路狹、……倘用火攻奈何。禁曰、君言是也。
前半セリフは演義（嘉靖本？）に基づく・後半駐馬聽二支以下はセリフも含めて草廬記20・21・22とほぼ同じ。火燒新野がないため前半は異なる。曹仁のかわりに張遼が獻策	創作＋草廬記	諸葛儒生（駐馬聽）・張遼謀士。演義では劉曄のセリフ・火燒新野のことなし。原型か？・逃げる理由について孔明の說明あり（演義にはなし）・以下韻の表示消える	縱然不降、亦可以宣愛民之心也。若見事急愿降、則荆州之地不戰自然而得。然後再擧荆襄之衆、徐圖江東以歸一統 嘉：縱然不降、亦可以見愛民之心也。若使事急來降、則荆州之地不須征戰矣。然後再擧荆襄之兵、可圖江南也。 毛：卽不降、亦可見愛民之心。 若其來降、　則荆州之地、可不戰而定也。
八聲甘州の前のセリフと水底魚兒、草廬記23に同じ（曲牌名は水中物）・文聘の水底魚兒、草廬記23の曹操の水底魚兒に類似・糜竺が捕らえられる際のセリフも類似・民衆に關する議論は演義（嘉靖本？）に基づく	創作＋草廬記	５－５なし（葉數は連續）。特に脫落がある形跡もなく、單なるミスか・劉琦が「感公（諸葛亮）昔日之敎以獲全生」とあるが、このこと劇中になし・尾聲ごとに韻變わる・５－８の題名に「灞橋」とあるのは不自然だが、草廬記23では張飛に「覇陵橋」で敵を防ぐよう命じている（本劇では長坂橋）・毛本は孔明を美化（右欄）	（孔明白）主公今擁大衆十餘萬、皆是百姓、披甲者少、似此幾時得到江陵。 嘉：孔明曰、……今擁大衆十餘萬、皆是百姓、披甲者少。日行十餘里、似此幾時得到江陵。 毛：衆將皆曰、…今擁大衆十餘萬、　日行十餘里、似此幾時得至江陵。
演義（毛本）に基づくが水底魚兒のみ少し草廬記23に似る・衆百姓甘夫人諢上・土地上・作墜井科雜扮金童玉女上作引下・土地幫繫阿	創作？	死ぬのは甘夫人（草廬記23では甘夫人がまず井戸に投身、後で糜夫人が趙雲に阿斗を託して牆の下にて金釵で自害。平話では糜夫人の死因不明、甘夫人が牆の下で自害。葉逢本では糜夫人が牆に觸れて自害。嘉靖本・	小將步行死戰、保夫人殺出重圍。 嘉：雲自步行、遇敵軍必當死戰。 毛：雲自步行死戰、保夫人透出重圍。

95	4－24	席上裸衣充鼓吏	禰衡擊鼓罵曹	禰衡	一枝花・九轉貨郎兒・四轉・五轉・六轉・九轉・煞尾	北曲套	演義（毛本）
96	5－1	曹操遣將戰諸葛	曹操遣夏侯惇討劉備	曹操	好事近・石榴花・越恁好・慶餘		演義（毛本）
97	5－2	孔明派將敵曹兵	諸葛亮派將迎敵	諸葛亮	新水令・駐馬聽・折桂令・雁兒落帶得勝令・掛玉鉤・沽美酒帶太平令・煞尾	北曲套	演義（毛本）
98	5－3	入重地曹兵中計	諸葛亮博望燒屯	諸葛亮	醉花陰・畫眉序・喜遷鶯・畫眉序・出隊子・滴溜子・刮地風・三段子・四門子・雙聲子・古水仙子・神仗兒・煞尾	北曲套	演義（毛本）
99	5－4	圖遠策徐庶招安	曹操遣徐庶說劉備	諸葛亮・劉備・徐庶	駐雲飛×3・駐馬聽×2・天仙子・梁州序×2・生查子×2・四邊靜		演義（嘉靖本？）・後半草廬記20・21・22
100	5－6（5－5はなし）	自率兆民逃難去	當陽曹操敗劉備	趙雲・劉備	園林好・啄木兒・三段子・滴溜子・尾聲・縷縷金・金錢花・八聲甘州・水底魚兒×2・不是路・掉角兒序・水底魚兒・掉角兒序・水底魚兒×2・尾聲・滴溜子×2・尾聲		演義（嘉靖本？）・一部草廬記23
101	5－7	戰長坂絶處逢生	長坂坡趙雲救阿斗	趙雲	山坡羊×2・鎖南枝×3・撲燈蛾・水底魚兒・尾		演義（毛本）・一部草廬記23

斗在懷內科・土地幫堆牆科下・地井出草人如馬延扮趙雲鎗挑草人起馬延下地井		毛本で牆を倒して井戸を覆うのは不自然)・土地神の助けあり・金童玉女が甘夫人を迎える・戰う相手はほぼ演義に從う	
演義の本文に異同少なく版本特定不能。草廬記24とは異なる	創作？	大喝した結果退くというのではなく合理化・草廬記では「在此一吼則橋分爲兩段、逆水而倒流」と平話・雜劇に同じ表現	
同上（ただし「浮橋」の語は毛本のみ）	創作？		
劉備の語は毛本にないが、後は毛本が近い。あるいは嘉靖本に脱落あるか。後の部分で演義の劉琦の言葉を劉備に流用している箇所は、明らかに嘉靖本に近い	創作？あるいは赤壁記？		（劉備白）…懷中何物。（趙雲白）所懷幼主、適才啼哭、此一回不見動靜、原來睡熟了。……不是江東之兵、定是曹操兵也。 嘉：子龍懷抱何物。子龍…曰、…適來公子尚在懷中、此一日袍內無動靜、多是不能保了。……不是江東之兵、卽是曹操軍也。 毛：（劉備の言なし）雲…曰…適來公子尚在懷中啼哭、此一會不見動靜、多是不能保也。……非曹操之軍、卽江東之軍也。
鷓鴣天の白	創作？	吳の狀況を一度にまとめて敍述	
前半は演義（草廬記も演義のセリフを用いるが少し異なる）似娘兒（草廬記は上園春）以下はセリフも含めてほぼ草廬記を短縮したもの	創作？＋草廬記	前半で使用している演義のセリフは嘉靖本に近い。草廬記も同じだが、演義から省略している部分が異なる	說南北兩軍互相吞併、吾則無事矣。 嘉：說南北兩軍互相吞併、吾則無事矣。若南軍勝照舊而殺操以取荆州之地、 毛：說南北兩軍互相吞併、若南軍勝、共誅曹操以取荆州之地、…… 草：說南北兩軍互相吞併、南勝則投南而攻北以取荆州之地、
セリフ、かなり異なるも演義（嘉靖本？）と一致多し・草廬記28とは異なる	創作？あるいは赤壁記？（曲數多く可能性あり）	孫權は淨（ここで初めて明記）・呂蒙群儒の一人（演義は異なる）	前到夏口探聽虛實、帶得一人深悉就裡、乃南陽諸葛孔明。（孫權白）莫非諸葛瑾之弟諸葛亮么 嘉：次至江夏相見、特問其虛實、有一人深知前故……諸葛瑾之弟諸葛亮也。權曰、莫非臥龍先生否。 毛：肅至江夏、引諸葛瑾之弟諸葛亮也。…權曰、臥龍先生在此乎。
セリフ演義によるが、完全には一致せず、底本特定困難	創作？		若不見棄、山人願施犬馬。 嘉：將軍不棄、願施犬馬之勞 毛：若蒙不棄、願效犬馬之勞
周瑜の命令のみ演義（嘉靖本？）と合致・衆仝搖船下	創作？赤壁記？		吾今奉命吊民伐罪、　　但大軍到處、不可驚擾百姓。 嘉：吾今奉命吊民伐罪、　　但以大軍到處、不得一概動擾。 毛：吾今奉命討之、諸君幸努力向前。大軍到處、不得擾民。
引の接雲鶴、草廬記30の菊花新前半と同じ。以下も四支の排歌を二支にするなど、多少削	草廬記・演義（嘉靖本？）あるいは	やはり呂蒙は文官の扱い・太史慈登場せず、程普が代行。草廬記では黃蓋・前半は草廬記に依據しつつ演義で增補し、後半は演義（嘉靖本？）	可佩吾劍作個明補、　若有言者卽斬 嘉：可佩吾劍作明甫、……如有但題……者可立斬

102	5－8	拒瀰橋粗中有細	張飛喝退曹軍	張飛	好事近×2・紅繡鞋・尾聲		演義（版本特定不能）
103	5－9	曹操追兵遇伏歸	曹操遇關公回軍	關公	普天樂・朝天子・普天樂・朝天子・普天樂		演義（版本特定不能）
104	5－10	趙雲懷主全身至	劉備拋阿斗	趙雲・劉備	新水令・折桂令・雁兒落帶得勝令・收江南・沽美酒帶太平令・尾聲	北曲套（複數歌唱）	演義（嘉靖本か？）
105	5－11	自稱王江東開宴	孫權稱王	孫權	新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶得勝令・僥僥令・收江南・園林好・沽美酒帶太平令・清江引	南北合套	？
106	5－12	商拒敵夏口維舟	魯肅探劉備	諸葛亮	江兒水×2		草廬記26・演義（嘉靖本？）
107	5－13	戰群儒舌吐蓮花	諸葛亮舌戰群儒	諸葛亮	八聲甘州・解三醒（酲）・踏莎行・粉孩兒・福馬郎・紅芍藥・耍孩兒・會河陽・縷縷金・越恁好・紅繡鞋・尾聲	南北合套	演義（嘉靖本？）
108	5－14	激周郎詩歌銅雀	諸葛亮智激周瑜	諸葛亮	園林好・月上海棠・江水兒・川撥棹・尾聲		演義
109	5－15	激將乃收遣將功	周瑜發令・糜竺探吳軍	周瑜	梁州新郎（集曲）×2・節節高・尾		演義（嘉靖本？）
110	5－16	醒人翻被醉人算	群英會・蔣幹盜書	周瑜	排歌×2		草廬記30・演義（嘉靖本？）

減しつつほぼ合致。前半については、セリフは演義（嘉靖本？）と合致するも、これは草廬記に由來するもの・後半は、草廬記も演義に基づくが、僞手紙の文面などは演義（嘉靖本？）の方に合致し、セリフも多く演義による	赤壁記？	にほぼよる	毛：公可佩吾劍作監酒、……如有但題　者卽斬 　我想周瑜是個精細之人、天明尋書不見、必然洩漏。 嘉：想周瑜是個精細之人、天明尋書不見、必然洩漏。 毛：周瑜是個精細人、天明尋書不見、必然害我。
ほとんど草廬記のまま（第二・四皀羅袍と第三好姐姐を削るのみ）	草廬記	二つの「蔣」の間で一行とばして後に補う	
二つの場面を一齣に・ほとんど草廬記のまま。前半は諸葛亮と魯肅の滑稽なやりとりを足し、周瑜と黃蓋の會話を詳しくする程度。後半は鬪黑麻を加える	草廬記	草廬記は演義（嘉靖本？）に曲辭の文言まで依據	
二つの部分を一齣に・はじめは草廬記の周瑜諸葛亮を迎える場面・黃蓋を打つ撲燈蛾は、草廬記のセリフ（演義にほぼ同じ）を曲に改變・後半は曲牌名一部異なるも、ほぼ草廬記のままだが、少し演義で補う（徐庶脫身のくだりなど）	草廬記	草廬記は演義に依據	
剔銀燈（草廬記は剪銀花）第二・四支を省略する程度でほぼ同じだが、末尾に諸葛亮を斬る命を追加	草廬記	草廬記は演義に依據・周瑜の令箭を借りて鎭壇とするのは演義になし（黃鶴樓の伏線だが本劇にはこのくだりなく矛盾）	
草廬記とは異なる	赤壁記？	風神登場	
草廬記とは異なる	創作？赤壁記？	草廬記では身代わりを殺させる	
出だしのみ草廬記・周瑜の手配りは演義による・駐雲飛は草廬記にもあるも曲辭異なる・水雲從中地井出分立科（役者で水雲を表現か）	草廬記＋創作？・あるいは赤壁記？	草廬記、身代わりの首の後に徐盛・丁奉登場、矛盾。本劇は僞首のことなし・草廬記も演義に依據・甘寧に蔡中蔡和を連れて行けと言いつつすぐに斬るのは矛盾（演義は二人を分けて使用）	
地の文を張遼のセリフ、黃蓋が助かった理由を周瑜のセリフにするなど、演義の樣々な箇所を運用。異同少なくテキストの特定困難・雜扮水雲從左右地井上擺科	創作？赤壁記？	草廬記は黃蓋死す（平話に同じ）	
水底魚兒は草廬記、他は創作？セリフは草廬	草廬記＋創作？		

111	5 －17	江東計獻一雙環	龐統獻連環計	龐統	懶畫眉×２・皂羅袍×２・・西地錦・皂羅袍・好姐姐×２		草廬記31
112	5 －18	河北自輸十萬矢	周瑜施計・諸葛亮取箭	諸葛亮・周瑜	風入松×２／憶鶯兒×２・鬪黑麻×２		草廬記32・33（前半）
113	5 －19	事可圖何妨肉苦	周瑜打黃蓋・闞澤投書	周瑜	憶多嬌・撲燈蛾×２／西地錦・粉蛾兒・一封書・玉胞肚・尾聲		草廬記33（後半）・34
114	5 －20	風不便未免心憂	諸葛亮約借東風	諸葛亮・周瑜	剔銀燈×２		草廬記35
115	5 －21	壇中可望不可攀	諸葛亮借東風	諸葛亮	鬪鵪鶉・紫花兒序・天淨沙・棄兒令・禿厮兒・收尾・縷縷金	北曲套＋縷縷金	？
116	5 －22	江上獨來還獨往	趙雲接應諸葛亮	諸葛亮	畫眉序・適溜子・鮑老催・雙聲子・尾聲		演義（特定不能）
117	5 －23	西北計成百道出	周瑜調將	周瑜	出隊子・駐雲飛		草廬記39・演義
118	5 －24	東南風動一軍灰	赤壁鏖兵	周瑜	點絳唇・粉蝶兒・好事近・石榴花・好事近・上小樓・撲燈蛾・尾聲	南北合套	演義（特定不能）
119	6 － 1	未可笑時偏發笑	曹操遭埋伏	曹操	點絳唇・水底魚兒・紅繡鞋・撲燈蛾・水底魚兒		草廬記42・演義

記と合致せず演義を加工して使用			
ほぼ赤壁記と一致（曲牌名異なり、赤壁記の步步嬌なく、水底魚兒・駐雲飛は赤壁記にない）・草廬記とは一致せず・セリフ赤壁記に近く、一部演義と共通・駐雲飛以外は關公のうたはすべて北曲（曹操らは南曲）・關公衝上	赤壁記	關公の登場詩で「惱得心中怒氣冲、怎肯私情廢公議」とあるが、前にこのことなし・關公のうたは北曲套	
演義ともあまり一致せず、草廬記にもなし。四郡記（『曲海總目提要』45）か？・設荆州城雜扮小軍將官引生扮孔明上	四郡記？		
諸葛亮が手順を說明するセリフと關公のセリフのみ演義と一致・錦囊記	錦囊記	鞏固登場（平話に同じ）・引の長生導引を劉備・諸葛亮・關公・張飛が分唱（他に少ない形式）・關公「本部下五百名梟刀手」錦囊記による。注⑲參照	
金旋と鞏志のやりとり演義（嘉靖本？）と一致・四郡記か？	四郡記？		加之張翼德乃當世虎將 嘉：加之張益德乃當世虎將 毛：加之張翼德驍勇非常
演義とはストーリーは同じだが文言一致せず・四郡記か？	四郡記？	吾主劉元德乃荆王之弟（平話と同じ）	
演義とはストーリーは同じだが文言一致せず・四郡記か？・前半は北曲套（はじめを缺く。主に關公）、尾聲の後、後半は南曲	四郡記？		
前半、趙雲・魏延とのやりとりほぼ演義（嘉靖本？）と一致・後半の呂範とのやりとりは草廬記44の魯肅とのやりとりに依據（鼓盆云々）。曲もほぼ同じ	錦囊記と草廬記	孫權の妹は新月公主・草廬記を流用するも演義に合わせて魯肅を呂範に變える	美色天下人愛之、公何獨如此。 趙範之兄、曾在鄉中有一面之交 嘉：美色天下人愛之、公何獨如此。 趙範之兄、曾在鄉中有一面之交 毛：此亦美事、公何如此。 趙範既與某結爲兄弟
諸葛亮の趙雲に對する命令、草廬記とほぼ同じ（演義とは異なる）。別離の詩も同じ（情到不堪回首處、一齊吩咐與東風。不適切）・雜扮水雲上	草廬記	喬元（玄）は「忠厚寬仁、未免好利、虎牢關有舊」・錦囊記の影響の有無は不明・草廬記はこの後黃鶴樓になり、ここで趙雲に錦囊を渡すのは不自然。45では周瑜は、諸葛亮は曹操を追って華容道にいると黃鶴樓雜劇と同じことを述べて前後矛盾	
末扮喬興上虛白作祥夢發譚科・草廬記47・演義のいずれとも異なる。錦囊記	錦囊記	劉備「虎牢一別失候起居」「舍弟趙雲」・孫策の遺言に「家門之事要問老夫（喬元）」を付加	
前半は草廬記47・演義のいずれとも異なる・後半國太の孫權に對する言葉は草廬記と一致	草廬記・錦囊記	幼女新月・國太が孫權を責める言葉のみ草廬記と一致。甘露寺なく、演義とは設定が異なる。錦囊記による	

120	6－2	絶無生處却逢生	華容道關公義釋曹操	關公	點絳唇・混江龍・水底魚兒・劉袞・油葫蘆・天下樂・滿江紅・駐雲飛	北曲套に南曲をまじえる	赤壁記（『時調青崑』巻二「華容釋操」）
121	6－3	據險要定策襲州	諸葛亮一氣周瑜	諸葛亮・周瑜	四邊靜・新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶得勝令・僥僥令・收江南・園林好・沽美酒帶太平令・尾聲	南北合套	？
122	6－4	計久長拈鬮取郡	定計取四郡	諸葛亮・劉關張趙	四邊靜×4		錦囊記
123	6－5	勸降不得自投降	張飛取武陵	張飛	水底魚兒×2・不是路・出隊子		演義（嘉靖本？）
124	6－6	計計却爲人算計	趙雲取桂陽	趙雲	紅繡鞋・風入松・奈子花×2・出隊子・駐馬聽×2・水底魚兒		
125	6－7	老將甘爲明聖用	關公取長沙	關公・黄忠	哪吒令・寄生草・水底魚兒・寄生草・尾聲・駐雲飛×2・窣地錦	北曲套＋南曲	？
126	6－8	軍師勸結晉秦歡	三將獻功・呂範說親	劉備一統	普天樂・催拍・桂枝香×2・大迓鼓×2		前半は演義（嘉靖本？）と錦囊記・後半（桂枝香）は草廬記
127	6－9	波浪來申繡榻盟	劉備過江	劉備一統	甘州歌（集曲）×2		草廬記44
128	6－10	過江初試錦囊計	劉備謁喬元	劉備・喬元	啄木兒×2・三段子・歸朝歡		錦囊記
129	6－11	巧氷人牽就婚姻	喬元成就婚姻	劉備・喬元・孫權	解三酲×2		錦囊記、一部のみ草廬記47

魯肅らのやりとり、末による長い美文以外はほぼ草廬記のまま。以下も順序を變え省略はあるが、ほぼ草廬記を利用	草廬記	「相持半世、尙懼兵器」、草廬記は「且扶半世、尙惧兵器」。草廬記誤りか。本劇の依據するところは？	
左慈のこと、一部演義と共通（急流勇退云々）	胡笳記？	「發石壁千年之祕、變化從心、洩天書三卷之藏、靈奇在手」演義の記述に合致するが平妖傳にも同じ・２－17を承けて胡笳記か	
陳與郊「文姬入塞」とは異なる	胡笳記？	浣溪沙による白・琴曲・胡曲（謎歌）・黃阿狗（蘇州人）我從小兒串過戲、如今還記得些、待我唱一兩隻崑弋兩腔的戲曲別別你們如何。（巴朗賒楞作喜科白）塞罕度拉、塞罕度拉。（阿狗白）我不唱舊戲、唱的就是娘娘本家琵琶記戲文。當日先中郎老爺中了狀元、金殿辭朝一出唱與你們聽聽……（唱金殿辭朝侉戲一段完）（樂屋落ちの事例。崑弋腔）	
草廬記49とは異なる	錦囊記？	一封書、實際に書簡の內容に用いられることが多い・草廬記と異なる。南山逸史の中郎女雜劇とも異なる（曹彰の戰勝による壓力という點は共通するが）。錦囊記か	疎遠孔明關張、各生怨望、自然散去、荆襄不戰而自得。 嘉：疎遠孔明關張、各生怨望、而自散去、荆襄可不戰而自得也。 毛：疎遠孔明關張等、使彼各生怨望、自然散去、然後荆州可圖也。
甘州歌以下は草廬記にセリフまでほぼ一致	草廬記・錦囊記	長い齣だが、後半三分の二は草廬記。初めの部分（張・黃・魏漁師に扮すること）は錦囊記。新月公主の名、草廬記にはなし	
草廬記49とは異なる	錦囊記？	船兵作唱吳歌・草廬記49は６－16のみ使用。演義とも異なる。錦囊記か	
	胡笳記？	相見歡の白・胡笳十八拍のうち第一・五・十・十二・十八拍を唱い、一拍ごとに三人のうた入るも、第十二拍のあとは「阿狗發諢唱背弓曲」・詞の白と騈體のセリフあり。胡笳記か	
セリフは演義に依據。一部毛本に近いが、基本は嘉靖本と一致。草廬記にはなし	創作？	周瑜が危惧するセリフは演義の一度目の魯肅派遣のものだが、會見の內容は二度目の派遣に該當	子敬誠實篤厚之人。……　我東吳起兵伐取。……兵馬到城下、一鼓平收。 嘉：子敬乃誠實篤厚之人也。……我東吳起軍發馬去取。……兵馬到城下、一鼓平收。 毛：子敬乃誠實人也。……　我東吳起兵去取。……那時乘勢殺之、奪取荆州。
セリフ演義（嘉靖本？）に依據	創作？		諸葛亮の「非親不解其禍」、嘉靖本にあって毛本になし
セリフ演義（嘉靖本？）に依據	創作？	衆扮水雲中地井上擺科・周瑜の遺書はここで血書として書かれる	劉某乃漢朝皇叔、忍背義而取西川乎。 嘉：孤乃漢朝皇叔、安忍背義而取川乎。 毛：孤與劉璋、皆漢室宗親、安忍背義而取西川。
『綴白裘』初編に見える『西川圖』「蘆花蕩」とほとんど合致。	西川圖	「黃鶴樓上將俺大哥謀害殺」と本劇と矛盾するうた。草廬記では周瑜が二度死ぬ形・『綴白裘』では鬪鶴鶉の	

130	6 －12	老新郎順諧伉儷	孫劉結婚	劉備・孫夫人	惜奴嬌・錦衣香・漿水令		草廬記48
131	6 －13	化鶴爲人開覺路	左慈戲曹操・曹操命送蔡文姫	左慈・曹操・蔡文姫	浪淘沙・好事近×2・千秋歳・越恁好・紅繡鞋・尙如縷煞		？
132	6 －14	鳴笳送馬入天關	文姫入塞	蔡文姫	端正好・快活三・要孩兒・三煞・二煞・一煞・尾聲	北曲套	？
133	6 －15	第二錦囊謀去吳	劉備公主決計赴荆州	劉備・孫夫人	一封書・瓦盆兒・榴花泣（集曲）・喜漁燈（集曲）・尾聲		演義（嘉靖本？）
134	6 －16	一雙美璧還歸趙	劉備走脫東吳	劉備・孫夫人	十棒鼓・三囑咐・雙令江兒水×2・甘州歌×2・水底魚兒・甘州歌×2・滴溜子・水底魚兒×2		草廬記49・錦囊記
135	6 －17	兩挫屠龍射虎威	關張大破周瑜	周瑜	勝葫蘆・水底魚・紅繡鞋・煞尾		？
136	6 －18	重翻捲葉吹蘆調	蔡文姫董祀結姻・文姫唱胡笳十八拍	蔡文姫	忒忒令×2・沈醉東風・臘梅花・園林好・川撥棹・尾聲		？
137	6 －19	請伐號舊計新施	周瑜立假途滅虢之計	周瑜	紅納襖		演義（嘉靖本？）
138	6 －20	告伐川假言眞聽	諸葛亮將計就計	諸葛亮	駐馬聽×2		演義（嘉靖本？）
139	6 －21	荆州城諸葛謀長	荆州城周瑜遇伏	周瑜	豹子令・水底魚兒・縷縷金×2		演義（嘉靖本？）
140	6 －22	蘆花蕩周郎命短	蘆花蕩周瑜歸天	周瑜・張飛	鬬鵪鶉・雪裡梅・調笑令・煞尾・四邊靜	北曲套	西川圖

草廬記46の黄鶴樓に續く張飛接應のくだりとはある程度合致するも差多い		「殺袁將膽量冲懐」を「俺釋嚴顔我的膽量高」に改める。袁祥（襄）の話が忘れられたことから考えて、本劇が古形か。北曲ゆえ依據するところあるか	
	？	演義とは一致せず・北曲套の一人獨唱。依據するところあるか	
演義に基づくが、異同少なく特定不能	創作？	鬼兵による操演あり	
演義（嘉靖本？）に依據	創作？		呂布二袁皆被滅之、南　抵　江漢、北　至　幽燕、 嘉：呂布二袁皆被滅之、南直抵于江漢、北直抵于幽燕 毛：呂布二袁皆爲所滅、
龐統轉白・やや微妙だが嘉靖本か	創作？鞏固の登場が疑問	鞏固登場（平話に同じ）・「我龐統自別了子敬」この設定本劇になし・龐掠四郡雜劇とは異なる	缺少一縣宰、公且任之、待日後有缺、自然重用 嘉：缺　一縣宰、公且任之、　如後有缺、　當重用 毛：缺少一縣宰、屈公任之、　如後有缺、却當重用
ほぼ演義（嘉靖本？）に依據	創作？		松閒　公世代簪纓、祖宗相傳、應立于廟堂、　輔佐天子 嘉：久閒明公世代簪纓、祖宗相輔、何不立於廟堂而輔佐天子 毛：久閒公世代簪纓、 何不立于廟堂、輔佐天子
演義（嘉靖本？）に依據かと思われるが、一部毛本と合致	創作？	嘉靖本にあって毛本にない部分を含むが、一部の文言が毛本と一致。中間のテキスト？	我川中不曾見此兵革、但以仁義治民……逆吾者死、非只能令人榮達、亦能令人滅族、汝可知否。 嘉：吾蜀中不曾見此兵革、但有以仁義定天下之士……逆吾者死、非只能令人榮達、亦能使人滅族、汝知之乎。 毛：吾蜀中不曾見此兵革、但以仁義治人……逆吾者死、汝知之乎。
末尾の張飛のセリフが演義と一致するのみ	？	裁判。賈氏と柳青による夫殺害・胡徒による盗難・錢廣による吳文に對する賴婚・僧侶靜空と尼姑定慮による密通・王思による成兒の誘拐・「千金義會」による賭博・長い場面であり、演義とも合致せず、依據するところあるか	
一部のセリフのみ演義と一致	創作？		
セリフほとんど演義（嘉靖本？）のまま（毛本とは異なる）・	創作？	「漢」を「汗」と表記	他乃漢朝之臣、以覇道居之 嘉：其他皆漢之蟊賊、以覇道居之 毛：其他皆漢之蟊賊、却都恃強侵占地土
セリフほぼ演義による	創作？		
末尾のみ演義（嘉靖本？）による	創作		倘一時有變、不可料也 嘉：倘一時有變、夫可量也 毛：還宜防之
セリフは多く演義（嘉靖本？）による。	創作？		吾弟兄乃漢室宗親、今日相逢痛飲、並無疑忌。 嘉：吾弟兄乃漢室宗親、　相逢痛飲、並無疑忌。

141	6 －23	哀動吳員皆服罪	諸葛亮弔周瑜	諸葛亮	端正好・滾繡毬・叨叨令・脫布衫・小梁州・快活三・朝天子	北曲套	？
142	6 －24	思圖蜀地大興妖	張魯起兵伐蜀	張魯	點絳唇・好事近×2・千秋歲×2・越恁好・尾聲		演義（特定不能）
143	7 － 1	遣張松許都說曹	劉璋遣張松	張松	畫眉序・不是路		演義（嘉靖本？）
144	7 － 2	屈龐統耒陽蒞任	龐統任耒陽縣令	龐統	桂枝香×2		演義（嘉靖本？）
145	7 － 3	嫉賢能曹操焚書	曹操燒孟德新書	張松	駐馬聽・駐雲飛		演義（嘉靖本？）
146	7 － 4	示威武張松肆謗	曹操逐張松	張松	梁州新郎（集曲）×2・節節高・尾聲		演義（嘉靖本？）
147	7 － 5	片言折獄服張飛	龐統斷獄	龐統	醉花陰・畫眉序・喜遷鶯・畫眉序・出隊子・滴溜子・刮地風・滴滴金・四門子・鮑老催・古水仙子・雙聲兒・煞尾	南北合套	？
148	7 － 6	屈己下賢尊龐統	劉備收龐統	龐統	園林好・江兒水×2・五供養・川撥棹・尾聲		演義（特定不能）
149	7 － 7	禮別駕誠心獻圖	張松獻圖	張松・劉備	一江風×4・皂羅袍・尾聲		演義（嘉靖本？）
150	7 － 8	見同僚私意謀主	張法孟謀獻蜀	張松	玉胞肚		演義（特定不能）
151	7 － 9	入西川情同雁序	劉備入蜀	劉備	出隊子×2・山花子・尾聲	演義（嘉靖本？）	
152	7 －10	開東閣宴比鴻門	涪城會上舞劍	劉備	粉孩兒・紅芍藥・福馬郎・會河陽・縷縷金・越恁好・紅繡鞋・尾聲		演義（嘉靖本？）

			毛：吾弟兄　同宗膏血、　　共議大事、并無二心。
セリフは多く演義（嘉靖本？）による	草廬記？	周善を周虚善とする・如知奈何（如之奈何の誤り）・周虚善殺されず	不亦哥哥爲重、私自逃歸、是何道理 嘉：不以俺哥哥爲重、私自歸家、是何道理 毛：不以俺哥哥爲重、私自歸家、這便無禮
セリフはほぼ演義（嘉靖本？）による	創作？		選精兵、今日起程、竟襲成都、一舉而下 嘉：只今便選精兵、晝夜兼道、徑襲成都、一舉便定 毛：只今便選精兵、晝夜兼道、徑襲成都
演義と展開同じだが文言一致せず	創作？		
セリフはほぼ演義（嘉靖本？）による	創作？	白馬ではなく的盧。的盧が龐統に祟るのが本來の形か	龐統のセリフ「我命在天、豈在人乎」、嘉靖本にあり、毛本になし
セリフはほぼ演義による	創作？	七夕を中秋に・關謀と表記	
諸葛亮が關公に與える指示はほぼ演義（他にセリフ少ない）	創作？		
セリフの內容演義（嘉靖本に近い）にほぼ合致するが、文言は微妙に異なる	創作？	「固耐劉備拜孔明爲軍師、分兵五路下川」前の狀況と合わず・張飛の「軍師之言信非謬」も前になし。他に基づくか	
セリフはほぼ演義（嘉靖本？）による	創作？	途中から北曲套。他の轉用か	魏延領一千長鎗手在左邊……殺開士卒（張任）願早賜一刀 嘉：魏延引一千長鎗手在左邊……殺開士卒……願早賜一刀 毛：魏延領一千長鎗手伏于左……殺散彼軍……可速殺我
馬超３－14までの話は尻切れのままいきなり張魯のもとに投じる	？	演義とも特に合致せず	
先設布城・セリフは演義（嘉靖本？）に依據	創作？	セリフは演義（嘉靖本？）に	況馬超有呂布之勇 嘉：況馬超有信布之勇 毛：今馬超之勇
演義とのセリフの一致は比較的少ないが、一致する部分は毛本	創作？	李恢の說得と馬超の投降と二つの場面・劉睃と馬漢を討つのは演義では趙雲、本劇では馬超・馬岱。嘉靖本で趙雲が「某來未曾效尺寸之功」というのは不自然で馬超にふさわしい（毛本は改めている）	有何面目以見天下之人 嘉：　何面見天下大丈夫乎 毛：　何面目見天下之人乎
五將それぞれのうた。特に基づくところは不明	創作？	魏延を入れて五虎將	
	セリフ演義とほぼ同じ	創作？	
各本に異同あり。曲の前のセリフは趙琦美抄本にほぼ合致。粉蝶兒	單刀會	雜劇には元刊本と趙琦美抄本（于小穀本か）あり。『大明天下春』６「雲長訓子」・『樂府萬象新』３「關雲長	

153	7 －11	趙子龍奮身救主	趙雲奪幼主	趙雲・孫夫人	醉扶歸・小措大・不是路掉角兒序×２・尾聲		演義（嘉靖本？）
154	7 －12	龐士元定計圖川	龐統定計取成都	龐統・劉備	畫眉序		演義（嘉靖本？）
155	7 －13	葭萌關蜀將遭誅	斬高沛楊懷	劉備・龐統	出隊子×２・畫眉序・水底魚兒		？
156	7 －14	落鳳坡軍師着箭	落鳳坡龐統受箭	龐統・劉備	不是路・普天樂・朝天子・普天樂・朝天子・普天樂		演義（嘉靖本？）
157	7 －15	一夜觀星哭鳳雛	諸葛亮聞報發軍	諸葛亮・關公	梁州新郎（集曲）・節節高・尾聲		演義（特定不能）
158	7 －16	詰朝解印辭荆土	諸葛亮解印付關公	諸葛亮・關公	好事近×２・千秋歲×２・尾聲		演義（特定不能）
159	7 －17	釋嚴顏大得其力	張飛釋嚴顏	嚴顏・張飛	水底魚兒×２・八聲甘州×２		演義？
160	7 －18	殺張任聿成厥名	金雁橋擒張任	張任・諸葛亮	駐雲飛・水底魚兒・粉蝶兒・鬬鵪鶉・上小樓・煞尾	途中から北曲套（諸葛亮の一人獨唱）	演義（嘉靖本？）
161	7 －19	錦馬超失水暗投	馬超投張魯	馬超・張魯	玉環清江引（集曲）・駐雲飛×２・駐馬聽×２		？
162	7 －20	莽張飛然火夜戰	馬超大戰張飛	馬超・張飛	粉孩兒・福馬郎・紅芳藥・會河陽・縷縷金・越恁好・紅繡鞋・尾聲		演義（嘉靖本？）
163	7 －21	馬氏一心歸漢室	馬超降劉備	馬超	紅衲襖・察地錦襠・紅衲襖・皀羅袍・畫眉序・滴溜子・鮑老催・雙聲子・尾聲		演義（毛本）
164	7 －22	劉家五虎下西川	五虎將略蜀	張・馬・趙・黃・魏	粉蝶兒・好事近・石榴花・好事近・鬬鵪鶉・撲燈蛾・上小樓・撲燈蛾・煞尾	南北合套	？
165	7 －23	知時歸命求安逸	劉備入成都	劉備・劉璋	出隊子×２・降黃龍×２・歸朝歡・尾聲		演義（特定不能）
166	7 －24	溯舊盟關公訓子	關公欲赴單刀會	關公	粉蝶兒・醉春風・十二月・堯民歌・石榴花・鬬鵪鶉・上小樓	北曲套	關漢卿「單刀會」

第一句「楚漢爭強」に合致するのは『綴白裘』のみだが、以下は一致するテキスト固定せず、石榴花第六句の「瓊花釀」と一致するのは元刊本と趙琦美抄本のみ。鬪鵪鶉第二句の「眞心便休想」も元刊本の「誠心便休想」・趙琦美抄本の「誠心更休想」以外は合致せず。鮑老兒末句も同じ。蔓青菜の「排戈甲列旗鎗」は、元刊本と趙琦美抄本（嚴密には後者）にしか存在せず		訓子」・『樂府紅珊』4「桃園記・漢壽亭侯訓子」・『大明春』6の「雲長訓子」はいずれもほぼ同內容で、雜劇とはかなり異なる。『綴白裘』8の「訓子」はいずれとも異なる・本劇では教訓を受けるのは關平ではなく關興・一致するテキストが定まらないが、元刊本・趙琦美抄本とのみ一致する例が多く、古形を留めた現存しないテキストによるか。	
	創作？	「龜雖壽」による歌舞・慶祝の場面で第七本を終える。第七本のみ齣數が奇數。齣名は165と對になる。166を後で插入したか	
關公の登場詩以下、末尾を除けばセリフまで基本的に『綴白裘』に同じ。同じ來源か。煞尾は他本の攪筝琶（『綴白裘』は曲牌名なし）。他本の尾聲もしくは煞尾は本劇にはなし	單刀會	元刊本・趙琦美抄本のほか、『風月錦囊』「羽赴單刀」「魯肅送關王」・『樂府紅珊』11「關雲長赴單刀會」・『萬壑清音』7「單刀赴會」・『怡春錦』7「四郡記・單刀赴會」・『玄雪譜』3「三國記・單刀會」、『綴白裘』1「刀會」、曲辭のみのテキストとして『珊珊集』3「赴會」・『樂府南音』「單刀赴會」（兩者同文）がある。『萬壑清音』以下の諸本はほぼおなじだが、『綴白裘』は實演用にセリフを增やしている	
演義と合致せず	創作？	駢文調のセリフや知識人風のやりとりあり。演義とは合致しないが、內容は王ではなく帝位につく際のもの	
演義と合致せず	創作？		
演義と合致せず	創作？	王と言いつつ明らかに皇帝に卽位の狀況。皇帝の御前ゆえ？・關公は荆襄王、張飛は東川王	
演義になし	創作？	操演七曜陣	
演義と合致せず	創作？	費詩は登場するも、關公が五虎將について不平をいうことはなし	
演義（部分により異なり特定困難。別のテキストによるか）・關平冲上	創作？		此書生之言也。　豈不聞…必獲全勝。關公雖智勇、何足惧哉。 嘉：汝是秀才之言、不曉破敵。豈不聞……何足惧之。 毛：此書生之言耳。　豈不聞……自可取勝。
演義（毛本）に合致	創作？	槐に關公の首を入れるという演義の本文を避けて「敵首」と曖昧にする	孤縱不疑、奈衆口何　……卿不負孤、孤亦必不負卿也 嘉：孤縱不疑、奈衆口所言…… 孤誓不敢負於卿也 毛：孤縱不疑、奈衆口何　……卿不負孤、孤亦必不負卿也

					×２・快活三・鮑老兒・剔銀燈・蔓青菜・煞尾		
167	７－25	仗勢加封肆舞歌	曹操封魏王	曹操	粉蝶兒・好事近・石榴花・好事近・鬬鵪鶉・撲燈蛾・上小樓・撲燈蛾・尾聲	南北合套	？
168	８－１	赴單刀魯肅消魂	關公赴單刀會	關公	新水令・駐馬聽・胡十八・沽美酒帶太平令・錦上花・雁兒落・得勝令・煞尾	北曲套	關漢卿「單刀會」
169	８－２	定蜀都群工勸進	群臣勸進劉備	劉備・諸葛亮	桂枝香×３・雙令江兒水（集曲）		？
170	８－３	允請郊天	法正築臺	群臣	點絳唇×２		？
171	８－４	西蜀正位	劉備卽王位	劉備	醉花陰・畫眉序・喜遷鶯・畫眉序・出隊子・神仗兒・刮地風・鬬雙鷄・古水仙子・煞尾	南北合套	？
172	８－５	聖武式昭華夏震	關公看操演	關公	五供養・新水令×２・攪箏琶	北曲	？
173	８－６	王猷久塞九襄開	關公受命發兵	關公	慶宣和・雁兒落帶得勝令・甜水令・折桂令・離亭宴煞	北曲	？
174	８－７	攻襄郡大隊奪門	關公取襄陽	關公	點絳唇・普天樂・朝天子・普天樂・朝天子・普天樂・朝天子・普天樂・朝天子	北曲	演義（特定困難）
175	８－８	救樊城小軍昇櫬	龐德昇櫬出征	龐德	一枝花・梁州第七・賀新郎・梧桐樹	北曲套	演義（毛本）

最後のやりとり演義に一致。異同少なく、テキストの特定不能	創作？	七曜陣と七杖兵（このこと演義になし。七軍からの發想で、演劇の視覺的效果をねらう）・關公矢を受けることなし。避けたか	
衆扮水雲持水切末上・衆曹軍作漂没科從地井下。斬龐德の部分は明らかに毛本による	創作？	毛本と本劇は關公に對する罵言を避けたか	汝故主亦在蜀爲大將。…… 吾寧死于刀下、豈降也。 嘉：故主馬超亦事吾兄爲將。……豎子、何謂降也。……寧死于刀下、安降無名之將耶。 毛：汝故主馬超亦在蜀中爲大將。 ……吾寧死于刀下、豈降汝耶。
雜扮水雲中地井上擺科・セリフ演義に合致するも、毛本に近い部分と嘉靖本に近い部分があり、特定困難	創作？	梟刀手	山水驟至、豈能長存。……願將軍耐心堅守、以爲國家保障 嘉：山水驟至、豈有長存。……願將軍耐守此城、以爲國家保障 毛：山水驟至、豈能長存。……願將軍固守此城、以爲　保障
前場設碁枰桌椅各坐科關公作出假臂・セリフは演義（毛本）にほぼ依據	？	關平、「父王」という（本劇の設定と矛盾）・金蕉葉以外は關公の一人獨唱	汝等敢　慢吾軍心麼……　聞關將軍乃天下英雄 嘉：汝等特來慢吾軍心耳……　聞知君俠乃天下大義之士 毛：汝等敢　慢吾軍心耶……因聞關將軍乃天下英雄
セリフは演義（毛本）に依據	創作？	呂蒙と陸遜の策までで、關公の敗北と死は全く描かれず	賤軀偶尓抱痾、何勞探問 嘉：某病軀有失迎待 毛：賤軀偶病、何勞探問
セリフは演義（毛本）に依據	創作？	西蜀夢雜劇とは異なる・關公の死明言されず	雲長有失、孤斷不獨生。軍師保守西川、孤來日自帥往救 嘉：孤弟有失、孤豈能獨生也。 孤來日自提一軍去救吾弟 毛：雲長有失、孤斷不獨生。 孤來日自提一軍去救雲長
場上設玉泉山科・雜扮衆雲使淨扮周倉關平引淨扮關公騎馬馬童隨上・演義（毛本）を使用しつつも、佛の世界における出來事という本劇の枠組みに合わす	創作？	君俠前身乃是佛門紅護也・且善惡報應將來自見分明（結末への伏線）・却已策名于紫府。・今當正位之期、玉旨少刻便到。准備接旨者。且喜彼此已成善果、老僧亦往西天去也	「向蒙相救、銘感不忘」、毛本にあって嘉靖本になし
雜扮衆天官從大雲板下作接見關公科・同上雲板科・內作設朝科	創作？	（揭諦）吾佛有旨道、關公前身原是佛門紅護法・茲封尓爲三界伏魔大帝・すべて「天數」とする	
劉備と韓當のやりとりは演義（毛本）に依據。後は特に一致せず・北曲套だが一人獨唱ではない	創作？	張飛の死も舞臺では演じられず、この場面で言及されるのみ	誓不與立於天地之間 嘉：誓不同　　天地共日月也 毛：誓不與立於天地之間
セリフほぼ演義（毛本）に依據	創作？	これ以前の狀況は陸遜のセリフで說明	今連營五六百里、……安得破乎／空自折將損兵 嘉：今入　五六百里、……擊之必無利矣／以此論之、空殺兵耳 毛：今連營五六百里、……安能破乎／空自損兵折將耳
演義になし	創作？	鵪鴣天のセリフ・戰鬪を演じず、報子の報告ですませる元雜劇式の手法	

176	8－9	守樊士卒無生氣	龐德大戰關公	關公・龐德	牧羊關・紅芍藥・菩薩梁州・元（玄）鶴鳴・烏夜啼・煞尾	北曲套（前齣と合わせて一套）	演義（特定不能）
177	8－10	舁櫬先鋒有死心	水淹七軍	關公・龐德	風入松×4		演義（毛本）
178	8－11	暗傷毒矢迎頭發	攻樊城關公受箭	關公	好事近×2・千秋歳・慶餘		演義（特定不能）
179	8－12	分痛楸枰對手談	華陀剔骨治關公	關公・華陀	鬪鵪鶉・紫花兒序・小桃紅・金蕉葉・調笑令・禿厮兒・聖藥王・麻郎兒・煞尾	北曲套	演義（毛本）
180	8－13	勝局全收一席談	陸遜獻策	呂蒙・陸遜	甘州歌（集曲）・桂花襲袍香（集曲）×2		演義（毛本）
181	8－14	禍機先入三更夢	劉備得凶夢	劉備	香徧滿・懶畫眉・本宮賺×2・浣沙溪・秋夜月・東甌令・金蓮子・慶餘		演義（毛本）
182	8－15	老比邱玉泉點化	玉泉山關公訪普淨	關公	醉花陰・喜遷鶯・出隊子・刮地風	北曲套（次齣に續く）	演義（毛本）
183	8－16	紅護法貝闕朝天	關公封伏魔大帝	關公	四門子・古水仙子・古棄兒令・古神仗兒・隨眉	北曲套（續き）	？
184	8－17	勢當全盛讐將復	虢亭劉備大破吳兵	劉備	粉蝶兒・醉春風・紅繡鞋・石榴花・鬪鵪鶉・滿庭芳・快活三・朝天子・上小樓×3・十二月・堯民歌・耍孩兒・一煞・煞尾	北曲套	演義（毛本）
185	8－18	探得連營火可攻	陸遜定計調諸將	陸遜	降黃龍×2・黃龍滾×2・三句兒煞		演義（毛本）
186	8－19	偵羽書屯營一炬	諸葛亮聞敗報	諸葛亮	好事近×2・太平令・撲燈蛾・太平令・撲燈蛾・節節高		？

雜扮神兵淨扮關公張飛魂引金童玉女執幢上・作閉目死科扮劉備假身上・セリフほぼ演義（嘉靖本？）に同じ。憶鶯兒は演義の趙雲に對するセリフを曲に改めたもの	創作？	劉永・劉理より馬謖への呼びかけ「先生」・關公と張飛の靈の迎えを受け、天上の音樂がなる中劉備が瞑目すると、魂を示すもう一人の劉備が現れ、關公張飛とともに退場する演出	何期智術淺陋、……因此羞見諸公。當今病勢垂危／　稍有怠慢、天人共誅尓等不孝之罪 嘉：何期智術淺陋、……羞回成都與丞相相見。今日病已危篤／稍有怠慢、天人共誅尓等不孝之子 毛：何期智識淺陋、……悔恨成疾、死在旦夕／　不可怠慢、
衆侍從引東嶽大帝從昇天門下上祿臺科雜扮衆神上祿臺作設朝科・判官引十殿閻君從酆都門上	創作？	東嶽大帝は淨・美文調のセリフ・東嶽大帝が「上帝」に上奏して裁可を得る	
鬼王出酆都門作按八方招八鬼上又招取中央鬼上共九鬼・北曲套だが一人獨唱ではない	創作？	劉繇・王郎・孫策等並皆制據一方とする・酆都鬼王登場・重犯共十一名	
地井內上三生魂地方鬼大頭鬼摸壁鬼無常鬼九都鬼鎖科三屍（曹操・郗慮・華歆）放地上	創作？	伏完のこと前にはなくここでいきなり亡靈が登場	
	創作？	三人に張遼と許褚も加えられるが、卜書きは「三魂」	
セリフは演義（嘉靖本？）に合致・北曲套だが一人獨唱ではない。	？	天蓬星以下の九星が登場、九宮之位を出て八陣圖を守る・黃承彥が陸遜を救うのは諸葛亮の指示	此石乃諸葛丞相入川……　此惑軍之術、有何益哉 嘉：　此石乃諸葛丞相入川之時……此乃惑軍之術也、有何益焉 毛：此處地名魚腹浦、諸葛亮入川之時……　此惑人之術耳、有何益焉
諸葛亮のセリフのみ少し演義に似る	創作？	ここではじめて帝位につく・後主は小旦・重々しく北曲から開始	
	創作？	以下曹操の十殿閻君巡りが演じられる。城隍神が頭殿に當たるか・城隍神は紀信・王允、孔融、盧植、禰衡、丁原、种輯、吉平、楊奉登場。本劇で演じられたのは王允、禰衡、丁原、吉平のことのみ。太尉楊奉は不可解・曹操、郗慮、華歆、荀彧、荀攸、毛玠、郭嘉、程昱、王粲、許褚、張遼犯人として登場	
衆水卒持水雲從地井上龍母隨上・作投江水卒龍母送從地井下・北曲套の一人獨唱。依據するところあるか	？	孫夫人「郡主娘娘」・日常的かつ喜劇的な胥吏のやりとりから始まる・末尾も典史の「皇帝是你做着哩」	
儀從引董承馬騰吉平從祿臺下仙樓・向下場取扛架大秤安中場捉曹操下中地井取假身以大秤鈎起曹操假身切末科・動刑鬼卒應放假身切末入地井科曹操中地井上（この間は地井よりセリフをいう）・內作細樂扮伏后董妃中天井各乘小雲兜下	創作？	二殿閻君・三層舞臺を運用。この種の效果のため執拗に冥府の場面が續くか	

187	8－20	託遺詔輔取兩言	劉備白帝城託孤歸天	劉備・諸葛亮	集賢賓・二郎神×2・憶鶯兒×2・尾聲		演義（嘉靖本？）
188	8－21	嶽帝奏申彰瘴權	東嶽大帝奏罰曹操	東嶽大帝	點絳唇・駐馬聽×4・意不盡	北曲	？
189	8－22	閻君牌攝奸讒魂	九鬼赴捉曹操	閻君九鬼	一枝花・梁州第七・牧羊關・元（玄）鶴鳴・烏夜啼・收尾	北曲套	？
190	8－23	補行陽世三章法	伏完董承馬騰活捉曹操	曹操	風入松・急三鎗・風入松・風入松		？
191	8－24	試取陰司九股叉	曹操赴陰司	曹操	急三鎗・風入松		？
192	9－1	魚腹威吳八陣圖	陸遜誤入八陣圖	陸遜	點絳唇・四邊靜・夜行船・喬牌兒・風入松・慶東原・新水令・沈醉東風・折桂令・殿前歡・掛玉鉤・煞尾	北曲套（新水令以下）	演義（嘉靖本？）
193	9－2	龍興嗣蜀三分國	劉禪登極	諸葛亮・劉禪	點絳唇×3・滴溜子・畫眉序・滴溜子・尾聲		？
194	9－3	初入冥途須掛號	城隍判善惡	曹操	集賢賓・逍遙樂・金菊香梧葉兒・醋葫蘆×3・柳葉兒・浪裡來殺	北曲套	？
195	9－4	自沈江浦欲全名	孫夫人投江	孫夫人	水底魚×2・端正好・滾繡毬・倘秀才・叨叨令・脫布衫・小梁州・煞尾	北曲套（初めの水底魚を除く）	？
196	9－5	二殿會三忠勘罪	二殿閻君會審董卓曹操	曹操	賞花時・醉花陰・畫眉序・喜遷鶯・畫眉序・出隊子・滴溜子・刮地風・滴滴金・四門子・雙聲子・古水仙子・煞尾	南北合套	？

七勝記になし（以下同じ）。『大明天下春』6「武侯平蠻」とは場面は同じだが内容異なる。演義（毛本）と近いが一致はせず	創作？	關索登場。「有何能」と問われて「武藝十八般件件通」と答え、「小小年紀便出此大言」といわれて魏延の大刀を舞わせる	
内容は同じだが演義の記述簡略	創作？	平蠻指示圖、演義はいずれも平蠻指掌圖	
董荼奴の名は嘉靖本に一致（毛本は董荼那）・内容は演義（嘉靖本）に一致	創作？	三郡平定のことを孟獲の口から述べる・三元帥が出擊を望んで爭うので三路に分かれるという展開は毛本になく嘉靖本と一致	
ほぼ演義と同じ展開だが、將の配置や趙・魏に對する言葉など少し異なる。完全には一致せず	創作？	將の數が演義より多い	
セリフ演義と同じ部分多いが、異同少なく特定困難	創作？		
セリフ演義と同じ部分多いが、異同少なく特定困難	創作？		
セリフ演義と同じ部分多いが、異同少なく特定困難	創作？		
セリフ多く演義（嘉靖本？）に依據	創作？	渡江の策を述べるのは土人ではなく呂凱（役者の節約？）	日閒盛熱……自然無事 嘉：日閒盛熱……自然無事 毛：日閒甚熱……方可無事
セリフ演義に近いが微妙に異なる。曲も第二駐馬泣は演義を敷衍	創作？		
セリフ演義に近い部分あり	創作？		
演義では簡單に敍述されるのみ（演義・七勝記では孟優）	創作？		
七勝記14とは異なる・展開は演義に同じだが、文言は一致せず	創作？		
内容演義と同じだが文言一致せず	創作？	演義の「非吾之不能也」を「非爾之能」とするなど、意圖的に演義と變えているように見える	
内容演義と同じだが文言ほとんど一致せず	創作？		
内容演義と同じだが文言ほとんど一致せず	創作？		
セリフほぼ演義に基づく。演義の異同少なく特定困難	創作？	孟攸の七言による長いセリフあり	

197	9－6	千軍擁一相征蠻	諸葛亮出師征蠻	諸葛亮	點絳唇・粉蝶兒・醉春風・石榴花・鬬鵪鶉・滿庭芳・上小樓×2・煞尾	北曲套	？
198	9－7	永昌郡郡曹獻圖	呂凱獻圖	呂凱・諸葛亮	宜春令×2・繡衣郎×2		？
199	9－8	銀坑洞洞主定策	孟獲定計	孟獲	點絳唇・風檢才・生姜芽×2		演義（嘉靖本？）
200	9－9	偏用少年激老將	諸葛亮用計激趙雲魏延	諸葛亮・趙雲・魏延	步步嬌・風入松×2・急三鎗・風入松		演義（特定不能）
201	9－10	只消一夕縶三蠻	諸葛亮大破三洞元帥	諸葛亮	劉袞・金錢花・大勝樂・五更香・五更轉・尾聲		演義（特定不能）
202	9－11	丞相擒蠻錦帶山	諸葛亮一擒孟獲	諸葛亮・孟獲	水底魚×3・點絳唇・雙令江兒水（集曲）		演義（特定不能）
203	9－12	逋囚拒漢瀘江水	孟獲瀘水拒蜀兵	孟獲	駐雲飛・燕兒舞・駐雲飛・大迓鼓×2		演義（特定不能）
204	9－13	漢軍五月渡瀘江	馬岱瀘江損兵	諸葛亮	啄木兒×2・三段子×2・歸朝歡×2		演義（嘉靖本？）
205	9－14	蠻師三更縛孟獲	董荼奴擒孟獲	董荼奴・孟獲	駐馬聽×2・駐馬泣×2・添字紅繡鞋・尾聲		演義（特定不能）
206	9－15	好相父再縱蠻王	諸葛亮二放孟獲	諸葛亮・孟獲	祝英臺×2		演義（特定不能）
207	9－16	親弟兄同誅叛帥	孟獲孟攸定假降計	孟獲	梨花兒×2・下山虎・蠻牌令		？
208	9－17	孟攸甲帳一啣杯	諸葛亮三擒孟獲	諸葛亮・孟獲	粉孩兒・福馬郎・紅芍藥・耍孩兒・會河陽・縷縷金・越恁好・紅繡鞋・尾聲	南北合套？	？
209	9－18	諸葛軍門三解縛	諸葛亮三放孟獲	諸葛亮・孟獲	新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶得勝令・僥僥令・收江南・園林好・沽美酒帶太平令・清江引	南北合套	演義（特定不能）
210	9－19	棄三營八蕃入阱	諸葛亮四擒孟獲	諸葛亮・孟獲	水底魚・甘州歌×3・六么令×4・尾聲		演義（特定不能）
211	9－20	饒一死四次歸巢	諸葛亮四放孟獲	諸葛亮・孟獲	梁州新郎（集曲）×2・節節高・尾聲		演義（特定不能）
212	9－21	禿龍洞窮寇借兵	孟獲求援朶思大王	孟獲・朶思大王	窣地錦襠・十棒鼓・歸仙洞・普賢歌×2・風入松×4		演義（特定不能）

セリフ多く演義（嘉靖本？）に基づく	創作？	馬援登場	萬望尊神、憐漢朝一派、大賜靈顯、護之佑之 嘉：萬望尊神、念漢朝大事之重、通靈顯聖、護之佑之 毛：萬望尊神、念本朝思義、通靈顯聖、護佑三軍
セリフ多く演義に基づく。演義の異同少なく特定困難	創作？		
場上設割舌屠腸切末・内現刀山切末	創作？	四殿閻君（三殿を缺く）・董卓・賈翊（詡）・李傕・郭汜を裁く。董卓「後來陳壽將人汚」と述べる・曹操に對し呂伯奢の訴え。華歆、郗慮、荀彧、荀攸、毛玠、郭嘉、程昱、王粲、許褚、張遼も登場。華歆、郗慮が弑妃實行犯として割舌屠腸される・九本の終わりに儀式的場面	
雲帳設山科・上雲帳撤山子（山の設置と登山の様が見えないように「雲帳」を設けるか）	創作？	諸仙登場。裴航など多くは戀愛がらみ・今有伏董二后妃原隷仙籍、偶謫人寰……昨者獻帝昇遐、我欲引他到來與二后妃相會、道明因果、重締仙緣・今有漢獻帝現在天臺山（劉晨・阮肇とともに）・歲寒三友之舞・天臺山に三人で赴く・十本の初めに慶祝劇	
次齣にかけて徐渭『四聲猿』の一つ「狂鼓史漁陽三弄」をほぼそのまま使用（上演上の必要ゆえと思われるセリフを若干追加。多少セリフの順序も入れ替え）・曹操作大模大樣判官笑科（四聲猿になし）	四聲猿	五殿閻君・禰衡が裸體になるくだりは削除（御前上演ゆえ？）	
『四聲猿』「狂鼓史漁陽三弄」の最後の部分を二曲削ってほぼそのまま使用・要孩兒を削って三煞を要孩兒とし、一煞も削除	四聲猿		
内上雲幙設布山科・演義にこの場面なし	創作？	演義のストーリーには合致するが、この場面は演義にはない	
上雲帳場上右側設山崖中場設禿龍洞・撤雲帳衆扮漢兵王平關索上・内容演義と同じだが文言ほとんど一致せず・七勝記21とは異なる	創作？		
扮申戲人虛白諢科・上席科雜要畢・セリフ演義による。嘉靖本か？（一箇所のみの異同）	創作？	藝能の場面。演義にない楊鋒をもてなす場面があるのはこのためか	子子孫孫、傾心事之 嘉：子子孫孫、傾心事之 毛：子子孫孫、傾心服事
		創作？	七殿閻君（六殿を缺く）・ここでは曹操ではなく董卓・賈詡・李傕・郭汜が裁かれ、賈詡は曹操とともに裁くとして八殿へ、董卓は鐵床、李傕・郭汜は鋸解の刑に

213	9－22	伏波祠山神指路	諸葛亮禱伏波廟得神應	諸葛亮	六么令×2・醉扶歸・步步嬌・園林好・江兒水・五供養・玉交枝・川撥棹	北曲主體	演義（嘉靖本？）
214	9－23	求萬安藝香薤菜	諸葛亮謁孟節得靈藥	諸葛亮	鎖南枝×3・孝南枝×2		演義（特定不能）
215	9－24	上四殿劍樹刀山	董卓曹操上刀山	董卓・曹操	新水令・步步嬌・折桂令・園林好・雁兒落・江兒水・得勝令・玉嬌枝・沽美酒帶太平令・尾聲	南北合套（北曲主體）	？
216	10－1	仙眷重圓兜率天	獻帝伏后董妃天臺山重圓	獻帝・伏后・董妃	集賢賓・逍遙樂・掛金索・金菊香・醋葫蘆×2・梧葉兒・後庭花・醋葫蘆・浪裡來煞	北曲套	？
217	10－2	除曹複演漁陽操	陰司禰衡演打鼓罵曹	禰衡・曹操	點絳唇・混江龍・油葫蘆・天下樂・哪吒令・鵲踏枝・寄生草・採茶歌（女樂による插入。第二支は削除）・六么序×2・青歌（哥）兒・寄生草・葫蘆草混・賺煞	北曲套	『四聲猿』「狂鼓史漁陽三弄」
218	10－3	授黃封修文天上	禰衡封修文舍人	禰衡	耍孩兒・二煞・煞尾	北曲套	『四聲猿』「狂鼓史漁陽三弄」
219	10－4	換白袷進說南荒	呂凱說楊鋒助蜀	呂凱・楊鋒	一江風×2・宜春令×2・尾聲		演義？
220	10－5	一宵蠻洞翻紅袖	楊鋒擒孟獲	孟獲・楊鋒	鎖窻寒×2・大勝樂×2・香柳娘		演義（特定不能）
221	10－6	五度轅門繫白纓	諸葛亮五放孟獲	諸葛亮・孟獲	獅子序・太平歌・駄環着・越恁好・尾聲		演義（嘉靖本？）
222	10－7	七殿嚴刑誅國賊	七殿閻君斷董卓	董卓	點絳唇・混江龍・油葫蘆・寄生草・煞尾	北曲套	？

一部のセリフ演義と合致するも、テキストの特定は困難	創作？		
假獅上作跳舞象見驚科下假獅發諢科下・展開は演義に同じだが、演義の記述簡略	創作？	諸葛亮の一人獨唱・獅子舞を演じる？	
一部のセリフ演義と合致するも、テキストの特定は困難	創作？		
演義簡略。兀突骨の自己紹介は演義と重なるが他は一致せず	創作？	平和に暮らす兀突骨を孟獲が欺いて出兵させることに改める	
一部のセリフ演義と合致するも、テキストの特定は困難	創作？	演義はこの部分簡略。後の桃花渡の戰における會話をここで使用	
曲辭も含め、基本的に演義（嘉靖本？）により少し改變	創作？		藤甲について「每人一身五片」という記述は毛本にはなく、嘉靖本には「五片共爲一副」と見える。魏延への命令も「以今日爲始」は嘉靖本にあり毛本になし
內淨扮左慈從雲兜下科・場上設寒氷地獄切末	創作？	八殿閻君・七殿より賈詡到着・左慈、道清（情）を要孩兒で唱う・董承、馬騰、吉平、王允ら昇天	
演義簡略。內容はほぼ合致	創作？	卜書きの記述、兀突骨から烏戈國王（しばしば烏弋に誤る）に變化	
上雲帳設山科・撤雲帳科・各坐科隨意歇科・上雲帳撤山科・內容ほぼ演義に同じだが文言一致せず	創作？	山を出し入れするごとに雲帳を使用	
一部のセリフ演義と合致するもテキストの特定は困難	創作？		
內容演義とかなり異なる	創作？		
演義の內容はごく簡略	創作？	異民族の服屬を強く強調	
演義の內容はごく簡略	創作？		
內奏樂衆扮祥雲使者持雲上・（忠臣義子）同從仙樓下・場上遮烏雲帳中地井上設轉輪藏一座・後場撤烏雲帳・輪下轉出各種扁毛畜生蟲豸罪人戴各色獸畜形皮從中地井入輪轉出至中場作哭泣科	創作？	十殿閻君の勢揃い（10－14では九殿に送るというセリフがあったが省略か）・再び丁原、盧植、王允のほか、种輯、何進、華陀、楊奉が「忠臣義士」として登場。華陀と何進は初めてだが、後者は特に不審・奸臣は董卓（龜）、曹操（鼈）、李儒（狼）、郗慮（兎）、華歆（兎）、李傕（鼠）、郭汜（羊）、賈詡（狼）、張濟（猪）、樊稠（熊）、張遼（蚯蚓）、許褚（猿）、郭嘉（猿）、程昱（狼）、荀彧（豹）、荀攸（虎）で、（）內の動物に轉生	
雜扮衆雲使持雲四天將衆儀從周倉關平引伏魔大帝上	創作？	忠臣義士今度は伏、董、丁、馬、王、种と楊奉に吳子蘭が加わる・禰衡、華陀、吉平は修文院に	

223	10－8	八蠻邪法敗天兵	木鹿大王破趙魏	木鹿大王・諸葛亮	點絳唇・水底魚×2・縷縷金×3・剔銀燈・尾聲		演義（特定不能）
224	10－9	粧獅子假且敗眞	諸葛亮大破木鹿大王	諸葛亮	鬪鵪鶉・紫花兒序・調笑令×2・禿厮兒・煞尾	北曲套	演義？
225	10－10	款降王擒而又縱	諸葛亮六放孟獲	諸葛亮・孟獲	梨花兒×2・？（又一體とするも、梨花兒でも前の引の臨江仙でもない）・尾聲		演義（特定不能）
226	10－11	乞救授激怒烏戈	孟獲請兵兀突骨	孟獲・兀突骨	吳小四・桂枝香×2		演義（特定不能）
227	10－12	追逋逃險逢藤甲	兀突骨破魏延	孟獲・兀突骨	駐馬聽×2・四邊靜×2		演義（特定不能）
228	10－13	相地宜得盤蛇谷	盤蛇谷諸葛亮定計	諸葛亮	勝如花×2・三段子・滴溜子		演義（嘉靖本？）
229	10－14	遭譖墮陰氷山	曹操墮寒氷地獄	曹操	水底魚兒×2・耍孩兒・黑麻序・好姐姐・錦衣香・漿水令・情未斷煞		？
230	10－15	誘烏蠻敗十五陣	魏延詐敗誘兀突骨	孟獲・兀突骨	滴溜子×2・神仗兒×2・雙聲子		演義（特定不能）
231	10－16	破藤甲燒三萬軍	諸葛亮火燒藤甲軍	諸葛亮・兀突骨	點絳唇・小桃紅・下山虎・蠻牌令・山麻稽・五韻美・五般宜・江頭送別・尾聲		演義（特定不能）
232	10－17	自此南人不復反	諸葛亮七擒孟獲	孟獲	孤雁飛・大迓鼓×2・金錢花		演義（特定不能）
233	10－18	卽今荒徼盡來王	孟獲心服諸葛亮	諸葛亮・孟獲	奈子宜春×2・大勝樂		？
234	10－19	一軍振旅唱鐃歌	蠻人送諸葛亮班師	諸葛亮・孟獲	水底魚・朝元令		演義？
235	10－20	九陛酬庸頒御酒	後主設宴勞諸葛亮	諸葛亮・後主	畫眉序・雙生子・尾聲		演義？
236	10－21	分善惡十殿輪廻	忠臣昇天奸臣入輪廻	十殿閻君	鬪鵪鶉・繡停針・紫花兒序・四般宜・金蕉葉・鬪黑麻・調笑令・憶多嬌・綿搭絮帶拙魯速・有餘情煞	南北合套	？
237	10－22	大褒崇九天翔步	關公封伏魔大帝遊行天宮	關公	榴花好（集曲）・好銀燈（集曲）・銀燈紅（集曲）・六花么	集曲のみ	？

雜扮四公曹祿臺上	創作？	混世魔、酒魔、色魔、財魔、氣魔、文魔、愁魔、睡魔、病魔、名利魔、花月魔、菩薩法術魔登場。各自六言主體の韻文で自己紹介・如今聖主當陽、邪魔斂迹（皇帝へのメッセージ）	
壽臺衆扮二十八宿上跳舞一回下壽臺雜扮十八魁星祿臺雜扮十八羅漢福臺雜扮十八仙眞上（以下三敎の關係者が登場）	創作？	三國から明までの歷史を語り、「列聖開建萬年圖、大淸朝無量福」と唱って「今日文昌司命會同如來佛太上老君共趨丹陛慶賀昇平」・天花樂に「一年價才過、不覺又是一年價春。哩哩天花、哩哩天花樂」とあり。蓮花落か？四季を唱う・同曲に「畫出淸明上河圖」とあり・麒麟、鳳凰、獅子、象、龍、虎の舞・「用花擺卍年春三字科」の後、「俺只願鞏固鞏固也那皇圖、遐昌遐昌也那帝道、大淸國、萬年長歌、天保神佛仙歲歲今朝、齊拍手、共唱一回哩哩天花樂」と結ぶ。關公の登場を除けば三國志とは無關係な慶祝演劇	

					（集曲）・剔銀燈集（集曲）・銀燈照芙蓉（集曲）		
238	10－23	群魔斂蹟清華甸	伏魔大帝命諸魔斂跡	關公	麻婆穿繡鞋（集曲）・芍藥掛銀燈（集曲）・千秋舞霓裳（集曲）・意不盡	集曲	?
239	10－24	三教同聲頌太平	三教教主頌太平	三教教主	三轉雁兒落・雁兒落梅花・天花樂（蓮花落？）・醉太平・天花樂・醉太平・天花樂・醉太平・天花樂・醉太平・天花樂		?